

『三国史記』記載对中国關係記事について

—その検討のための予備的考察—

深津行徳

I

一九六〇年代以降、特に北朝鮮民主主義人民共和国(以下、共和国と略す)を中心として構築された新しい古代東アジア史像(1)に触発され、当該研究が活況を呈している。共和国の研究は、戦前の日本に於ける『日本書紀』の偏重と、彼らによってその無批判な継承と評価される戦後の日本歴史学者による古代東アジア史像に対する批判として提出されたものであった。そしてその史料的根拠は『三国史記』による所が多い。すなわち、両者の古代東アジア史像の相違は、『日本書紀』、『三国史記』両史書の史料的価値に対する評価によるところが大きいのであり、共和国による提言は『三国史記』に対する史料批判の欠如と、その重要性を認識させるものであったと言える。

このような背景から、『三国史記』の史料的価値そのものを論じる研究も多くなってきた。(2)そのなかで特に研究が進んでいるのは、原典の指摘、比較が可能な对中国關係の記事についてである。

周知のごとく『三国史記』には中国史書の名を明記して引用する箇所がかなりあるが、それとともに朝鮮三国と中国諸王朝との交渉を伝える記事の大部分は中国史書によったと考えられている。ところが中国史書に記載されていないが『三国史記』に記載されている記事も数多い。これらについて今西龍氏は、『三国史記』編者が中国史書から關係記事を引用する際「相当年代の下に何等の顧慮なく挿入」したと考えられた。(3)また末松保和氏は「中国史書の記事の導入」に『三国史記重撰の根本的態度』を見られ、それにもかかわらず記事の転引が粗雑であったと指摘されている。(4)以上のような見解は、『三国史記』の成立年代が新しいという漠然とした不安感とともに、その史料的価値を低評価する大きな根拠であったといえよう。これに対して坂元義種氏、田中俊明氏はそれぞれ百濟本紀(以下、済紀と略す)、高句麗本紀(以下、麗紀と略す)を検討の対象とされ、中国史書からの記事の転引の欠落には『三国史記』編者の意識的な史料操作の結果によるものがあることを指摘された。両氏の研究は『三国史記』全体を検討の対象としたものではなく、問題関

心、研究結果も少しく異なるが、関連中国史料の全てを抽出した上で『三国史記』の記事と比較するという方法は、この分野の研究にとって有効であったと思われる。

古代東アジア像再構成のために急務である『三国史記』の史料批判は、右のように個々の研究は行われているが、なお全体としては十分に行われているとはいえない。ただしそのような大きな仕事は一度に為し得るものではなく、全体を見すえた上での基礎的な作業の積み重ねが必要であろう。『三国史記』に於ける对中国交渉記事の史料批判についても、残された新羅本紀(以下、羅紀と略す)が検討されなければならない。そこで小稿では、坂元氏、田中氏の研究に導かれたつ、羅紀の对中国交渉記事を検討し、以ってそれを論じるための分析視角を提出することを目的とする。

II A

羅紀に記載された对中国関係記事と中国史書に見える中国諸王朝と新羅との交渉を伝える史料とを対照させる事を中心に、新羅と中

国諸王朝との交渉を拾遺したものが左表である。『三国史記』編纂時に編者が中国史書を広く渉猟したことは明かであるから、羅紀の对中国交渉記事記載に際してもそれらの関連中国史料が参照されたであろう。左表の記事は、この視点から次の四つに分類することができる。

- (一) 羅紀の記事に対応する記事が中国史書にないもの
 - (二) 羅紀の記事が中国史書にない記述を含むもの
 - (三) 羅紀の記事が中国史料の範囲で記載されているもの
 - (四) 中国史書に記事があるが羅紀に記載がないもの
- 小稿では(二)(三)を検討し、羅紀編者が中国史料をどの様に利用しているか考えてみたい。

II B

羅紀に記載された对中国交渉記事について、それに対応する中国史料が一種類しかない場合、編者は当然それを利用したであろう。ではほぼ同内容の複数の中国史料が存在する場合、どのような立場

号 番				中 国 史 書		内 容	備 考
4	3	2	1	西 曆	王 年		
36	14	4	B. C. 28		赫居世 30	対応なし 梁書 (伝) 魏陳北齊隋書 (伝) 南史 (伝) 北史 (伝) 旧唐書 (伝) 新唐書 (伝) 唐会要 通鑑 太平御覽 資治通鑑	
儒理 13・8	南解元・7	〇	〇	〇	〇	楽浪人来攻 楽浪兵来攻 楽浪来攻 楽浪来攻	

61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	
644	644	643	643	643	643	642	642	640	640	639	636	635	633	632	632	631	631	629	627	627	626	625	624	623	621	615	613	611	608	604	
〃	〃	×	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	×	〃	〃	〃	善徳元	〃	×	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	〃	〃	〃	〃	
13		12	12	12	11	11	9				5	4	2	54		53	51	49	49	48	47	46	45	43		35	33	30	26		
〃	正	9	3	正	8	正	5						7	12	正	7	9	11	6	7	11	3	10	7		7				7	
				○		○		○			○		○		○							○	○		○		○	○	○	○	
										○		○			○	○					○	○		○							
			○									○				○	○						○		○						
	朝	朝	備	朝	朝					○		封	朝			○	○	朝	朝	朝	朝	朝	封	朝	朝						
唐、高句麗へ遣使	〃	唐へ入貢	唐へ遣使・上言	唐と交流	〃	〃	〃	〃	〃	唐へ入貢	唐と交流	唐冊命	唐へ入貢	〃	唐冊命	〃	〃	〃	〃	〃	唐へ入貢	唐冊命	〃	唐へ入貢	唐冊命	唐へ入貢	唐冊命	唐へ入貢	唐冊命	唐へ入貢	
				月次独自				↑52	↑53					↑45	↑46	月次独自						月次独自		月次独自		月次独自		使者名あり、『遺事』にもあり	「事在高句麗紀」とあり	〃	〃

『天地瑞祥志』『新旧唐書』劉仁軌伝
にもあり

169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139
726	724	724	723	723	722	719	719	718	717	717	717	716	716	715	714	714	714	713	713	713	712	712	712	711	710	709	707	706	706	706
"	"	"	"	"	"	x	"	"	"	x	x	"	"	"	"	"	"	"	x	"	x	"	"	"	"	"	"	"	"	"
25	23	23	22	22	21	18	17	16				15	15	14	13	13	12		12			11	11	10	9	8	6	5	5	5
.
4	12	2	4	3	10	正	6	9				3	3	3	10	2	2	10		2		3	2	12	正	6	12	10	8	4

Q

朝朝褒朝 朝褒褒褒 朝朝褒朝 褒朝納 朝朝朝 朝朝朝朝朝朝朝朝朝

[illegible]

[illegible]

224	223	222	221	220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	110	209	208	207	206	205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194
774	773	773	772	768	768	767	766	765	763	762	758	756	755	748	747	746	745	744	744	744	743	743	742	740	739	738	738	738	738	737
〃	〃	〃	〃	〃	〃	惠恭 3	×	〃	〃	〃	〃	〃	〃	×	〃	〃	×	×	〃	〃	〃	景徳 2	×	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
10	9	9	8	4	4	3		24	22	21	17	15	14		6	5			3	3	2	〃		4	3	2	2	2	2	元
・	・	・	・	・	・	・		・	・	・	・	・	・		・	・			・	・	・	・		・	・	・	・	・	・	・
4	6	4	正	9	春	7		4	4	9	8	2	4		正	2			4	2	12	3		3	正	4	3	2	2	12

				○		○	○		○	○		○	○									○	○			○	○		○	○
○		○	○			○	○					○										○								
						○	○					○										○			○					

朝	朝	朝	朝	朝	朝	褒	封	朝		朝	褒	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	封	朝	褒		朝		朝		朝		朝
〃	〃	〃	〃	唐へ入貢	唐冊命	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	唐へ入貢	唐冊命	唐へ入貢	王妃を冊命	唐使、書物を献上	唐使に黄金等を賜う	唐へ入貢	王妃を冊命	唐冊命	唐へ入貢

但し『旧唐書』は年次のみ	月次独自、朝は別遣使力	『全唐文』にもあり	↓ 215	↓ 216																										↓ 192
				月次独自																										

[illegible]

[illegible]

O

唐へ入貢
僧行寂還る
崔承祐入唐
僧道微入唐
唐、王師範を冊す
唐へ入貢
僧利嚴入唐
唐へ入貢
僧道微還る
唐へ入貢
僧玄暉入唐
僧麗嚴還る
僧慶猷還る
弓裔、呉に朝貢
俞彥規、高麗に投す
高麗、契丹へ入貢
朴巖、高麗に投す
後唐へ入貢
王逢規、後唐へ入貢
後唐へ入貢
高麗、契丹に遣使
僧玄暉還る
高麗、契丹に遣使
高麗、後唐へ入貢
契丹へ入貢
甄萱、後唐より冊命
高麗、契丹へ入貢
後唐へ入貢

『太子寺塔碑』にあり
『崔承祐伝』にあり
↑315『無為岬寺塔碑』にあり
↑312『崔致遠伝』にもあり
↑311
『広照寺塔碑』にあり
↑310『無為岬寺塔碑』にあり
↑329『淨土寺塔碑』にあり
『菩提寺塔碑』にあり
『五竜寺塔碑』にあり
『高麗史』『節要』にあり
〃
〃
月次独自『五代史』『旧五代史』『五代会要』にもあり
『五代史』にもあり
〃
『五代会要』にもあり
『遼史』にあり
↑317『淨土寺塔碑』にあり
『遼史』にあり
『五代史』『旧五代史』『五代会要』にもあり
『遼史』にあり
『甄萱伝』にあり
『遼史』にあり
『五代史』『旧五代史』『五代会要』

[illegible]

(注)

1 『対応なし』とは、『三国史記』の記事に対応する記事が中国史書に見えないもの、あるいは中国史書に見えない事項が『三国史記』にある事を示す。

2 中国史書の(伝)は東夷伝を表わす。

3 中国史料の『冊府元龜』の欄の略称は次の如し。朝↓外臣部朝貢 封↓同封冊 褒↓同褒異 交↓同交侵 納↓同納質 請↓同請求 備↓同備禦 互↓同互市 通↓同通好 鞫↓同鞫訊 森↓同森詐 宴↓帝王部宴享 征↓同征討 却↓同却貢獻 来↓同来遠 拓↓同拓土 立↓同立功 選↓同選將。なお、複数存在する場合には備考欄に記した。

4 備考欄の↑印は関連記事を表わす。また書名の略称は次の如し。『遺事』↓『三国遺事』、『節要』↓『高麗史節要』。

5 ()でくくった記事は羅紀以外の史料による新羅以外の朝鮮半島の国と中国との交渉記事を表わす。

新羅王募秦。始遣使隨百濟奉獻。(後略)

をとつたであろうか。右掲表から該当するものを摘出し、検討を加える。⁽⁸⁾

(a) 一二番

「遣使於梁。貢方物。」

当記事に関連する中国史料は、次の如し。

①『梁書』武帝紀 普通二年
冬十一月。百濟新羅國各獻遣使方物。

②『梁書』新羅伝 普通二年
王姓募名秦。始使使隨百濟奉獻方物。

③『南史』梁本紀 普通二年
冬十一月。百濟新羅國各遣朝貢。

④『南史』新羅伝 普通二年
王姓募名秦。始使使隨百濟奉獻方物。

⑤『通典』边防新羅
王姓募名秦。始使人隨百濟獻方物。(後略)

⑥『冊府元龜』外臣部鞫譯 普通二年

「冊府元龜。姓募名秦。」

先に見たように、新羅王「募(慕)秦(泰)」の名を伝える中国史料は複数存在するにも関わらず、その中から『冊府元龜』を選んで注記しているのは、小稿の主題にとって示唆的である。一二番記事には月次、百濟随伴の記載がなく、その点で⑥『冊府元龜』外臣部鞫譯の記事と最も近い。以上から、あるいは羅紀の文章は⑥によつたものと考ええる。すなわち、『冊府元龜』∨『梁書』『南史』『通典』。

(b) 一九番、二一番

定型化した冊封記事であり、短文であるので文章の比較は難しいが、「爲新羅王」「仍襲*官爵」「兩語句とも見えるのが④のみであるので、それによったと考える。すなわち、『冊封元龜』∨『旧唐書』『唐会要』『資治通鑑』。

但し、④、及び①、⑤には、この冊立が十月であったと伝えるが、羅紀にはその月次を採らない。留意。

(e) 一三三番、二〇〇番、二〇五番、二二二番、二四九番
(一三三)「春正月。遣使入唐貢方物。」

①『唐会要』新羅

(長壽三年。遣使來朝。

②『朝貢』長安三年

正月。新羅(中略)遣使朝貢。

月次をも記す②によったと考える。『冊府元龜』∨『唐会要』。

二〇〇番、二二二番記事も同様に、月次をも記す『朝貢』を転載する。また二〇五番記事は、『朝貢』と『唐会要』はほぼ同文ながら、「献馬」の語があり記載が詳細な『朝貢』に拠り、二四九番記事も記載の詳細な『朝貢』を転載している。⁽¹⁰⁾

以上、当項の検討を通して、羅紀編者の中国史料に対する態度として次の点が指摘できよう。

(A)「『冊府元龜』の重視」

II C

同一事件に対する複数の中国史料が存在し、各々が異なった内容

を伝える場合、編者はどのような立場をとったであろうか。

(a) 三九番、四〇番

(三九)「冬十一月。遣使大唐朝貢。因訟高句麗塞路。使不得朝。且數侵入。」

(四〇)「秋七月。遣使大唐朝貢。唐高祖遣朱子奢來。詔諭與高句麗連和。」

中国史書には両年の朝鮮三国と唐との交渉を、以下の如く伝える。

①『朝貢』武德八年

十一月。新羅百濟並遣使朝貢。

②『新唐書』高麗伝
明年(武德八?)新羅百濟上書。言建武閉道。使不得朝。且數侵入。有詔散騎侍郎朱子奢持節諭和。建武謝罪。乃請與二國平。

③『旧唐書』本紀 武德九年

是年。高麗(中略)百濟(中略)新羅(中略)遣使朝貢。

④『旧唐書』高麗伝 武德九年

新羅百濟遣使訟建武。云閉其道路。不得入朝。又相與有隙。屢相侵掠。詔員外散騎侍郎朱子奢往和解之。建武奉表謝罪。請與新羅對使會明。

⑤『旧唐書』百濟伝

因訟高麗閉道路。不許來通中國。詔遣朱子奢往和之。

⑥『新唐書』百濟伝

後五年(武德九)。獻明光鏡。且訟高麗梗貢道。

⑦『旧唐書』朱子奢伝

貞觀初。高麗百濟同伐新羅。連兵數年不解。新羅遣使告急。乃假子誓員外散騎侍郎充使。噓可以釋三國之憾。雅有儀觀。東夷大欽敬之。三國王皆上表謝罪。賜遣甚厚。

⑧『朝貢』 武德九年

七月。新羅遣使朝貢。

⑨『朝貢』 武德九年

十二月。高麗百濟並遣使朝貢。

⑩『資治通鑑』唐紀 武德九年

新羅百濟高麗三國有宿仇。迭相攻擊。上遣國子助教朱子奢。往諭指。三國皆上表謝罪。

以上の中国史料からは、a 新羅、百濟が高句麗の非道を訴え、b 唐が朱子奢を派遣、c 高句麗等が陳謝するという、この事件の大筋が復原できよう。しかしそれぞれの年月次や子細については情報が混乱し、細部にわたる事件の推移を復原することは容易ではない。a については、②のみが武德八年と伝え、④⑥⑩は武德九年とする。前者を採るならば①との関連が指摘でき、後者を採れば⑧との関連が目される。但し⑧には百濟の遣使については触れず、問題が残る。またcについては、⑦⑩が三國ともに上表謝罪したとするが、⑨には新羅の名が見えない。これらの諸点を勘案して、試みに、当事件の推移を再構成してみたい。

まずa、bについて。④⑩はbを武德九年と伝えるが、注意すべきは、この両史料には、aが、この朱子奢派遣の理由として付けられていると読むこともできるということである。すなわち④⑩の主眼は朱子奢派遣を伝えることにあり、そう考えれば新羅、百濟の遣使

は必ずしも武德九年とする必要はない。逆に、②はaを伝えることを主眼とし、bをその結果として付したと考えれば、④⑩と②との間に矛盾は生じない。すなわち、aは武德八年、bは武德九年の史実とすることができ。そう考えてよければ、①に見る新羅遣使はaを伝えたものとし、aに十一月という月次を加筆することが可能であろう。次にcについてであるが、高句麗が謝罪のために遣使したことは②④にあり、③⑨⑩とも矛盾しない。問題は新羅、百濟も高句麗と同時に遣使したとする⑩と、③⑧⑨との関係である。まず③についてであるが、これは武德九年に三國が遣使したことを示すもので、三國が同時に遣使したとするものではない。憶測であるが、⑩に三國が謝罪のために遣使したとするのはこの史料に引かれたか、あるいは記事の内容から加筆したものではないだろうか。⑨にある百濟と高句麗の遣使こそが、この事件の結末、すなわち高句麗の謝罪使と百濟の返礼を伝えたものと考えたい。新羅の遣使については⑨には見えず、また、⑧に遣使したとある。ここで⑧の遣使が新羅の当事件に対する返礼を伝えたものと考えるには、右の⑨検討から時期的に無理がある。よって⑧は、新羅が高句麗の非道を重ねて訴えたか、あるいは当事件とは無関係で、新羅は返礼使を送らなかつたと理解したい。以上の検討から、当期の唐と朝鮮三國との交渉を再構成すれば次の如し。

武德八年十一月 新羅と百濟、高句麗の非道を訴訟

武德九年 七月 新羅使至る

唐、朱子奢派遣

十二月 高句麗の謝罪使、百濟の返礼使至る

さて、麗紀、済紀には当事件を次のように記載する。

麗紀宋留王九年条(六二六 武徳九年)

新羅百濟遣使於唐上言。高句麗閉道。使不得朝。又屢相侵掠。帝遣散騎侍郎朱子奢持節諭和。王奉表謝罪。請與二國平。

済紀武王二十六年条(六二五 武徳八年)

冬十一月。遣使入唐朝貢。

済紀武王二十七年条(六二六 武徳九年)

遣使入唐獻明光鑑。因訟高句麗梗道路。不許來朝上國。高祖遣散騎常侍朱子奢。來訟諭我及高句麗平其怨。

冬十二月。遣使入唐朝貢。

三本紀の記載と中国史料を比較すると、まず羅紀の三九番記事の依拠書として①②が指摘できよう。すなわち「十一月」は①、「使不得朝。且數侵入。」は②にのみ見える。当記事は①をベースにして、より詳細な記述のある②の記載を加筆したものと考ええる。四〇番記事は、「七月」という月次が⑧に依拠していることは確実であるが、他は特定できない。

次に麗紀の文章は、②④を合成して作っている。他史料には異なった語句もあるのにあえて②④に依拠するのは、それが高麗伝であることによるのかも知れない。ところが、aについては羅紀が採用した①の月次を採らない。また、筆者は、⑨にある十二月の遣使がcであると推察したが、麗紀ではこの⑨を採らない。これは麗紀編者が、高句麗と直接関係の無い①については省略し、⑨については筆者と同様の考証をした上で、後述するベースとした記事の尊重のため、あえて月次を加筆しなかったのだと評価しておく。

最後に済紀には、①⑨がそのまま転載されている。またaについては依拠書が指摘できないが、「獻明光鑑」の字句を⑥から補っている。注意すべきは、羅紀が①をaと関連させて記載するのに対し、済紀では麗紀と同様、そうしないことである。このことは、少なくとも羅紀と済紀、麗紀の編者が異なることを示唆する。

以上の検討の結果から、『三国史記』編者が中国史料を利用する際の態度として、一応、次の点が指摘できるであろう。

(B) 「各本紀に於て、直接関係しない事項は省略することもありうる。」羅紀に於ては①をaと関連させて記載するのに対し、麗紀に①の月次を採らないのはこれによる。そう考えてよければ、『三国史記』編者は、筆者が試みたように関係史料をすべて勘案して史的事実を再構成した上で記載を行ったのではなく、別の方法によったとしなければならない。すなわち、

(C) 「ベースになる記事を選び、その記述を尊重した。」ベースとする記事の選択基準としては、当記事の検討からは「最も詳細な記述のあるもの」が一つの候補となろうが、なお検討を要する。

(D) 「できるだけ詳細な語句を拾遺した。」済紀に「獻明光鑑」の語句を補っていることがこれであるが、月次は例としないことに注意。麗紀に於て⑨の月次をとらないのは、麗紀が月次を記さない②④をベースにしたからだと考ええる。すなわち、(C) V(D)。

(b) 七六番、七七番

〔七六〕「春正月。高句麗與百濟靺鞨連兵。侵軼我北境。取三十城。遣使入唐救援。」

〔七七〕「三月。唐遣營州都督程名振。左右衛中郎將蘇定方。發兵擊高句麗。」

①『旧唐書』本紀 永徽六年

三月、營州都督程名振破高麗於貴端水。

②『旧唐書』百濟伝 永徽六年

新羅王金春秋又表稱。百濟與高麗靺鞨侵其北界。已沒三十餘城。

③『旧唐書』新羅伝 永徽六年

百濟與高麗靺鞨率兵侵其北海。攻陷三十餘城。春秋遣使上表救援。

④『旧唐書』程名振伝 永徽六年

果除營州都督兼東夷都護。又率兵破高麗於貴端水。焚其新城。殺獲甚衆。

⑤『新唐書』本紀 永徽六年

二月乙丑。營州都督名振。左衛中郎將蘇定方。伐高麗。

五月壬午。及高麗戰于貴端水敗之。

⑥『新唐書』高麗伝 永徽六年

新羅訴高麗靺鞨奪三十六城。惟天子哀救。

有詔。營州都督程名振。左衛中郎將蘇定方率師討之。至新城敗高麗兵。火外郭及墟落引還。

⑦『新唐書』百濟伝 永徽六年

新羅訴百濟高麗靺鞨取北境三十城。

⑧『新唐書』新羅 永徽六年

百濟高麗靺鞨共伐取其三十城。使者來請救。

命蘇定方討之。

⑨『冊府元龜』外臣部征討 永徽六年

五月。程名振率兵渡遼水至高麗。以名振兵少。及開六城門出兵。渡貴端水與名振合戰。賊徒大敗。奔走過水。欲入城不得。殺獲千餘人。名振縱兵。焚其羅郭及村落而還。

⑩『資治通鑑』唐紀 永徽六年

正月。高麗與百濟靺鞨。連兵侵新羅北境。取三十三城。新羅王春秋遣使救援。

二月乙丑。遣營州都督程名振。左衛中郎將蘇定方發兵高麗。

夏五月壬午。名振等度遼水。高麗見其兵少。開門度貴端水逆戰。名振等奮擊。大破之。殺獲千餘人。焚其外郭及村落而還。

先ず七六番記事について。②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩にはほ同様の記載があるが、月次及び「連兵」、「三十三城」両語句は⑩のみにあり、羅紀の文章は⑩に最も近い。また七七番記事は、麗紀にも関連する記載があるが、⑩を転載した文章である。いま羅紀(七七番記事)、⑩、麗紀の記載を併記し比較すると、次の如くである。

〔羅紀〕三月。

唐 遣營州都督程名振。左右衛中郎將

〔⑩〕 二月乙丑。

遣營州都督程名振。左衛中郎將

〔麗紀〕 二月。

高宗遣營州都督程名振。左衛中郎將

蘇定方。發兵 擊高句麗。

×

蘇定方。發兵 擊高麗。夏五月。名振等度遼水。吾人

蘇定方。將兵來擊。夏五月。程名振等渡遼水。高

×

見其兵少。開門度貴湍水逆戰。名振等奮擊大克之。殺獲千餘
 麗見其兵少。開門度貴湍水逆戰。名振等奮擊大破之。殺獲千餘

人。焚其外郭及村落而還。

人。焚其外郭及村落而歸。

このように七六番、七七番記事は⑩を転載したものと考えられる。
 七七番記事に「三月」という独自の月次を伝えるが、これは誤刻の
 可能性を考えたい。この⑩は、当事件について最も詳細に、a 正月
 の新羅の遣使、b 二月の唐軍隊の派遣、c 五月の唐と高句麗の交戦
 が記載されている。しかし羅紀に記載されるのはa b、麗紀にはb
 cのみであつて、それぞれ当該国に直接関係する部分以外は省略し
 ている。すなわち前記(B)が確認できる。

(c) 一一六番

「春正月。王納高句麗叛衆。又據百濟故地。使人守之。唐高宗大
 怒。詔削王官爵。王弟右驍衛員外大將軍臨海郡公仁問在京師。立
 以爲新羅王。使歸國。以左庶子同中書門下三品劉仁軌爲鷄林道大
 總管。衛尉卿李弼。右領軍大將軍李謹行副之。發兵來討。」

①『旧唐書』本紀 咸亨五年

春二月壬午。遣太子左庶子同中書門下三品劉仁軌爲鷄林道大總管。
 以討新羅。仍令衛尉卿李弼。右領軍大將軍李謹行副之。

②『新唐書』本紀 上元元年

春二月壬午。劉仁軌爲鷄林道行軍大總管。以伐新羅。

③『新唐書』新羅伝 咸亨五年

納高麗叛衆。略百濟地守之。帝怒。詔削官爵。以其弟右驍衛員外
 大將軍臨海郡公仁問爲新羅王。自京師歸國。詔劉仁軌爲鷄林道大
 總管。衛尉卿李弼。右領軍大將軍李謹行副之。發兵窮討。

④『新唐書』劉仁軌伝 咸亨五年。

爲雞林道大總管。東伐新羅。仁軌率兵絕瓠蘆河。攻大鎮七重城。

破之。進爵爲公。子及兄子授上柱國者三人。州黨榮之。號所居爲
 樂城鄉三柱里。俄拜尚書左僕射兼太子賓客。仍知政事。

⑤『唐会要』新羅 上元元年

二月。新羅王金法敏既納高句麗叛亡之衆。又封百濟故地。遣兵守
 之。帝大怒。詔削法敏官爵。遣宰臣劉仁軌討之。仍以法敏弟右驍
 衛員外大將軍臨海郡公金仁問爲新羅王。時仁問在京師。詔令歸國
 以代其兄。仁問行至中路。聞新羅降。仁問乃還。

⑥『冊府元龜』帝王部選將 咸亨五年

二月。遣太子左庶子同中書門下三品劉仁軌爲鷄林道大總管。以討
 新羅。仍令衛尉卿李弼。右領軍大將軍李謹行副之。

⑦『資治通鑑』唐紀 上元元年

春正月壬午。以左庶子同中書門下三品劉仁軌爲鷄林道大總管。衛
 尉卿李弼。右領軍大將軍李謹行副之。發兵討新羅。時新羅王法敏
 既納高麗叛衆。又據百濟故地。使人守之。上大怒。詔削法敏官爵。
 其弟右驍衛員外大將軍臨海郡公仁問在京師。立以爲新羅王。使歸
 國。

右諸史料はほぼ同内容であるが、劉仁軌等の派遣について①②⑤

⑥は二月とし、⑦のみ羅紀と同じく正月条にかける。また羅紀の語句は⑦とよく一致し「又據百濟故地」「使人守之」等）、以上から羅紀の文章は⑦によって文飾されていると考えられる。しかし⑦には仁軌等の派遣、その理由の順で記されているのに対し、羅紀は、①⑤⑥と同様、理由、派遣の順で記載している。もし羅紀が⑦に依拠して書かれたとするなら、前述(C)と矛盾することになる。また戦闘の詳細について記す④を利用した形跡はない。留意。

(d) 一二五番

「遣使入唐。奏請禮記并文章。則天令所司。寫吉凶要禮。并於文館詞林採其詞涉規誡者。勒成五十卷。賜之。」

①『旧唐書』新羅伝 垂拱二年

政明遣使來朝。因上表請唐禮一部并雜文章。則天令所寫吉凶要禮。并於文館詞林採其詞涉規誡者。勒成五十卷以賜之。

②『新唐書』新羅伝

遣使者朝。丐唐禮及它文辭。武后賜吉凶禮并文詞五十篇。

③『冊府元龜』外臣部請求 垂拱二年

二月。新羅王金政明遣使請禮記一部并新文章。令所司寫吉凶要禮。并於文館詞林採其詞涉規誡者。勒成五十卷賜之。

①と③はほぼ同文で、②よりも記載が詳細である。羅紀の文章は前者によっているが、③にのみ記された月次は採らない。

(e) 一六四番

「冬十月。遣大奈麻金仁壹入唐賀。并獻方物。」

①『唐会要』新羅 開元十年

頻遣使獻方物。

②『朝貢』開元十年

十月乙巳。新羅遣大奈麻金仁壹來賀正。并獻方物。

当記事はより詳細な記載のある②を全文転載している。

(f) 一六六番

「夏四月。遣使入唐。獻果下馬一匹。牛黃。人參。美鬣。朝霞紬。魚牙紬。鏤鷹鈴。海豹皮。金銀等。上表曰。臣鄉居海曲。地處遐陬。元無泉客之珍。本乏賓人之貨。敢將方產之物。塵瀆天官。驚蹇之才。滓穢龍廐。竊方燕家。散類楚鷄。深覺覲顔。彌增戰汗。」

①『新唐書』新羅伝

開元中。數入朝。獻果下馬。朝霞紬。魚牙紬。海豹皮。

②『唐会要』新羅 開元十二年

興光遣使獻果下馬二匹。牛黃。人參。頭髮。朝霞紬。魚牙。納紬。鏤鷹鈴。海豹皮。金銀等。仍上表陳謝。

③『朝貢』開元十一年

十一年四月。新羅王金興光遣使。獻果下馬一匹及牛黃。人參。頭髮。朝霞紬。魚牙。鏤鷹鈴。海豹皮。金銀等。興光上言曰。臣鄉居海曲。地處遐陬。元無泉客之珍。本乏賓人之貨。敢將方產之物。塵瀆天官。驚蹇之才。滓穢龍廐。竊方燕家。敢類楚雞。深覺覲顔。彌增戰汗。

当記事は最も詳細な記載のある③を全文転載したものである。

(g) 一六七番

「二月。遣金武勳入唐賀正。武勳還。玄宗降書曰。卿每承正朔。朝貢闕庭。言念所懷。深可嘉尚。又得所進雜物等。並踰越滄波。跋涉草莽。物既精麗。深表卿心。今賜卿錦袍金帶及綵素共二千匹。以答誠獻。至宜領也。」

①『唐会要』新羅 開元十二年

遣其臣金武勳來賀正。及武勳還。降書賜之。

②『朝貢』開元十二年

二月。(中略)新羅遣其臣金武勳。(中略)來賀正。各賜帛五十匹。放還蕃。

③『冊府元龜』外臣部褒異 開元十二年

二月。新羅遣其臣金武勳來賀正。

五月辛酉。新羅賀正使金武勳還蕃。上降書。謂新羅王金興光曰。卿每承正朔。朝貢闕庭。言念所懷。深可嘉尚。又得所進雜物等。並踰越滄波。跋涉草莽。物既精麗。深表卿心。今賜卿錦袍金帶及綵素共二千匹。以答誠獻。至宜領也。

④『冊府元龜』外臣部通好 開元十二年

五月。新羅賀正使金武勳還蕃。帝降書。謂新羅王金興光曰。卿每承正朔。朝貢闕庭。言念所懷。深可嘉尚。又得所進雜物等。並踰越滄波。跋涉草莽。物既精麗。深表卿心。今賜卿錦袍金帶及綵素共二千匹。以答來獻。至宜領之。

当年の新羅入貢を伝える中国史料は①②③であり、②③はそれを二月とする。この入貢使が書を賜ったことを伝えるのは①③④で③④はそれを五月とする。このうち③の記載が最も詳細で、二月の新

羅遣使と五月に賜った書の内容を記す。③と④に記される書の内容は二字異なるだけでほぼ同文であるが、羅紀に記載された書の内容は③と全く一致する。以上から、二月の入貢とそれに続いて書の内容を記す羅紀の文章は、最も詳細な記述のある③をそのまま転載したものと考えられる。但し③にある書を賜った月次(五月)について、記載を落としている。

(h) 一八二番、一八四番

(一八二)「冬十二月。遣王姪志廉。朝唐謝恩。初帝賜王白鸚鵡雄雌各一隻紫羅繡袍。金銀鈿器物。瑞紋錦。五色羅綵。共三百餘段。王上表謝曰。伏惟陛下執象開元。聖文神武。應千齡之昌運。致萬物之嘉祥。風雲所通。咸承至德。日月所照。共被深仁。臣地隔蓬壺。天慈洽遠。卿朕華夏。睿渥覃幽。伏視瓊文。跪披玉匣。含九霄之雨露。帶五彩之鸞鸞。辯惠靈離。素着兩妙。或稱長安之樂。或傳聖主之恩。羅錦彩章。金銀寶鈿。見之者爛目。聞之者驚心。原其獻款之功。實由先祖。錫比非常之寵。延及末孫。微效似塵。重恩如嶽。循涯揣分。何以上酬。詔饗志廉內殿。賜以束帛。」

(一八四)「夏四月。遣大臣金端竭丹入唐賀正。帝宴見於內殿。授衛尉少卿。賜緋欄袍。平漫銀帶及絹六十匹。先時遣王姪志廉謝恩。獻小馬兩匹。狗三頭。金五百兩。銀二十兩。布六十匹。牛黃二十兩。人蔘二百斤。頭髮一百兩。海豹皮一十六張。及是授志廉鴻臚少卿員外置。」

①『唐会要』新羅

至開元二十一年。加興光寧海軍使。其年。命太僕卿員外置同正員金思蘭使於新羅。思蘭本新羅之行人。恭而有禮。因留宿衛。及是委以出疆之任。且便之也。前年。帝賜興光白鸚鵡雄雌各一。及紫羅繡袍、金銀鈿器物、瑞文繡緋羅、五色羅、綵綾。共三百餘段。至是。興光遣使從姪志廉奉表陳謝。仍奏國內有芝草生。畫圖而獻。二十年。又遣其大臣金端竭丹來賀正。又遣姪志廉來獻方物。授志廉鴻臚少卿員外置同正員。賜絹百疋。留宿衛。

② 『冊府元龜』外臣部褒異 開元二十一年

十二月乙未。新羅王興光遣姪志廉。來朝謝恩也。初帝賜興光白鸚鵡雄雌各一隻。及紫羅繡袍。金銀鈿器物。瑞文錦。五色羅綵。共三百餘段。興光表曰。伏惟陛下執象開元。聖文神武。應千齡之昌運。致萬物之嘉祥。風雲所通。咸承至德。日月所照。共被深仁。臣地隔蓬壺。天慈洽遠。鄉睽華夏。睿澤覃幽。伏覩瓊文。跪披玉匣。含九霄之雨露。帶五彩之鸞鸞。辯惠靈禽。素蒼兩妙。或稱長安之樂。或傳聖主之恩。羅錦彩章。金銀寶鈿。見之者爛目。聞之者驚心。原其獻款之功。實緣先祖。錫此非昔之寵。延及未孫。微效若塵。重恩如岳。循揣分。何以上酬。詔鑒志廉內殿。賜以束帛。

③ 『朝貢』開元二十二年

(四月)新羅王興光遣其大臣金端竭丹來賀正。先時興光遣其姪志廉謝恩獻小馬兩匹。狗三頭。金百兩。銀二千兩。布六十疋。牛黃二十兩。人參二百斤。頭髮一百兩。海豹皮一十六張。及是授志廉鴻臚少卿員外置。

④ 『冊府元龜』外臣部褒異 開元二十二年

正月壬子。新羅王興光大臣金端竭丹來賀正。帝於內殿宴之。衛尉

少卿員外賜緋襪袍。平漫。銀帶及絹六十匹。放還蕃。

⑤ 『文苑英華』(略)⁽¹²⁾

まず①には、開元二十年の事として月次を記さずに、金端竭丹の入朝と金志廉の入朝、宿衛を伝える。両者は「又遣*」という形で併記されているから、別々の遣使として記されていると考えるべきであろう。ところが金端竭丹の入朝については、以下に述べるように、他史料には開元二十二年と伝える。①では金志廉について開元二十年に宿衛と記しながら、二十一年に新羅の陳謝使として入朝したと記しており不自然である。開元二十一年の金志廉入朝については他史料にもあり動かせないとすると、上記金端竭丹の入朝とともに金志廉の入朝、宿衛を記す①の開元二十年の記事は錯簡している可能性があらう。①の開元年間の記事は「十年」、「十二年」、「至十二年」、「至二十一年」、「二十年」、「二十三年」、「至二十八年」と続いており、「至十二年」は「至十三年」の、「二十年」は前後の記事の配列から考えて「二十二年」の誤刻と考えられる。そう考えてよければ、①に記載された唐・羅交渉を次のように復原できるであらう。

開元二十年 太宗、新羅王に賜物(a)

二十一年 唐、金思蘭を新羅に派遣、新羅王に加爵

金志廉入朝、a に対して謝恩

二十二年 金端竭丹入朝、賀正

金志廉入朝、宿衛

一方②④には、開元二十一年十二月乙未に太宗が新羅王に賜物したことに対する返礼として金志廉が入朝し、二十二年正月壬子に金

端竭丹が賀正したとする。また③には、二十二年四月に金端竭丹の賀正と金志廉に対する加爵があったとする。まず③の記載についてであるが、金端竭丹の入朝について、賀正使である彼が四月に入朝したとするのは不自然であり、正月とする④の記載に従うべきであろう。とすれば「四月」という月次は、金志廉の入朝あるいは彼への加爵に関する記載であると解釈しなければならぬまい。この間の事情を記した史料として、同じ『冊府元龜』に次の様な記載がある。

⑥『冊府元龜』外臣部助国討伐 開元二十二年

二月。新羅王興光從弟左領軍衛員外將軍忠信上表曰。臣所奉進止。令臣執節本國。發兵馬討除鞮鞢。有事續奏者。臣自奉聖旨。誓將致命。當此之時。爲替人金孝万身亡。便留臣宿衛。臣本國王以臣久侍天庭。遣使從姪志廉代臣。今已到訖。臣即含還。每思前所奉進止。無忘夙夜。陛下先有制。加本國王興光寧海軍大使。錫之旌節。以討凶殘。皇威載臨。雖遠猶近。君則有命。臣敢不祗。蠢爾夷俘。計以悔禍。然除惡務本。布憲惟新。故出師。義貴乎三申。縱敵患貽於數代。伏望陛下因臣還國。以副使假臣。盡將天旨。再宣殊裔。豈惟斯怒益振。固亦武夫作氣。必傾其巢穴。靜此荒隅。遂夷臣之小誠。爲國家之大利。臣等復乘桴滄海。獻捷丹闕。效毛髮之功。答雨露之施。臣所望也。伏惟陛下圖之。帝許焉。

実は、⑥は一八三番記事の依拠史料であって両者はほぼ同文なのだが、ともかく⑥によって金志廉は開元二十二年二月の時点で唐に滞在しており、金忠信にかわる宿衛の任をおびていたことが確認できよう。志廉の入朝は②にある二十一年十二月であって、賀正使たる金端竭丹に付随したものと考えられる。「四月」という月次は、

忠信の帰国に伴ない宿衛の任についた志廉に対する加爵の月次とすべきであろう。以上、『冊府元龜』から復原し得る当期の唐・羅交渉は次の如し。

開元二十年 二月 太宗、新羅王に賜物(a、一八〇番記事)
二十一年七月 唐、金思蘭を新羅に派遣、新羅王に加爵

(b、一八一番記事)

十二月 金志廉、金端竭丹入朝、志廉、a に対して謝恩(c)

二十二年正月 金端竭丹賀正(d)

二月 宿衛金忠信上表(e、一八三番記事)

四月 唐、新宿衛金志廉に加爵(f)

さて羅紀には、a c については詳細な記載のある『冊府元龜』が全文転載され、e については月次不記載ながら、文章は「丹府元龜」と同文である。月次の遺漏についてであるが、羅紀に於いては、中国史料に見える日次をほとんど探らず、一括して削除したと考えてよい。月次については、基本的には記載することを原則としたようだが、これを漏らす場合もある事は、前項までも指摘した。このeの場合について考えると、開元二十二年にあたる聖德王紀三十三年条は、正月条に王と百官との会議を記した後にeが置かれ、続いて四月条を立てて一八四番記事が記載されている。すなわち、「二月」という月次を漏しながらも、妥当な位置に配列されているのである。このような月次の脱落をすべて単純な誤刻と考えるにはあまりに例が多すぎ、一方、羅紀編者の杜撰としてのみ処理できない事は次のd fの事例に明らかである。この点、後者を待つ。

次にであるが、先述の如く、fは金志廉に対する加爵を伝えるものであるから、その点では「冊府元龜」がfを記した③史料を「朝貢」として区分しているのはふさわしくなく、「喪異」等に区分すべきであろう。「朝貢」に区分された③史料を読むかぎり金端竭丹の賀正は開元二十二年四月であったとも解釈でき、羅紀編者にとつては④史料との齟齬が意識されたに相違ない。すなわち一八四番記事は、③史料に記す金端竭丹の賀正の部分を削って④史料の文言を はめ込む形になっているから、④の「正月」という月次は羅紀編者により意識的に削除されたと考えなければならないのである。ここで羅紀編者が、④によって「正月」の金端竭丹の賀正、③によって「四月」の金志廉への加爵を記すという方法を探らなかった事に注意しなければならぬ。羅紀編者にとつては③と④の月次の違いは、同一事件に対する二者択一すべき異伝であり、ここで捨てられた「正月」という月次は、賀正使が四月に入朝したという不合理な記載となつても、顧りみられる事がないのである。つまり、史料を収集して歴史的事実を再構成した上で記事作成をするのではなく、個々の事件に関する複数の史料を検討し、個別に記事を作成していると言える。では③と④の取捨の要因は何であろうか。両史料を比較すると、③が金端竭丹の賀正と金志廉への加爵の二つを記すのに対して、④に記載されるのは前者のみである。羅紀編者は③に記載された二つの事項を一連のものとして理解し、④より詳細な記事であると判断したのではないだろうか。但し、金端竭丹の賀正については④に子細があり、これを③の該当部分にはめ込んだのである。

さて右の様な手順により作成された記事は、歴史的事実を描写し

ない。しかし、記事作成が恣意的なものでなく、一つの原則が認められるなら、それからの歴史の再構成は十分可能である。これまでの検討からその原則が明らかになりつつあると思われるが、尚、考察を進める。

(i) 二五九番

「十一月。遣使入唐朝貢。穆宗召見麟德殿。宴賜有差。」

①『旧唐書』新羅伝 元和十五年

十一月。遣使朝貢。

②『唐会要』新羅 元和十五年

遣使朝貢。

③『朝貢』元和十五年

十一月。新羅(中略)遣使朝貢。

④『冊府元龜』外臣部喪異 元和十五年

十二月壬辰。對新羅(中略)使于麟德殿。宴賜有差。

④の新羅使は、①③に見える十一月入貢の新羅使を指すのであろう。羅紀編者も両者を同一のものと判断し、①あるいは③をベースとし、④の記載を加筆したものと考ええる。

II D

次に、中国史料にも対応記事があるが、その範囲を越えて独自の内容を伝える記事について検討を加える。

(a) 三六番、三八番

(三六)「秋七月。王遣使大唐。朝貢方物。高祖親勞問之。遣通直散騎常侍庾文素來聘。賜以璽書及畫屏風錦綵三百段。」

①『旧唐書』新羅伝 武徳四年

遣使朝貢。高祖親勞問之。遣通直散騎侍郎庾文素往使焉。賜以璽書及畫屏風錦綵三百段。自此朝貢不絶。

②『新唐書』新羅伝 武徳四年

王眞平遣使者入朝。高祖詔通直散騎侍郎庾文素持節答賀。

③『朝貢』 武徳四年

是月(十月)。新羅國(中略)遣使朝貢。

(三八)「三月。唐高祖降使。冊王爲柱國樂浪郡公新羅王。」

④『旧唐書』本紀 武徳七年

正月己酉。新羅王金眞平爲樂浪郡王。

⑤『旧唐書』新羅伝 武徳七年

遣使冊拜金眞平爲柱國封樂浪王新羅王。

⑥『新唐書』新羅伝 武徳七年

拜柱國封樂浪郡王新羅王。

⑦『封冊』 武徳七年

正月。新羅王金眞平爲樂浪郡王。

⑧『資治通鑑』唐紀 武徳七年

正月丁未。新羅王金眞平爲樂浪郡王。

三六番記事の文章は①とほぼ同文である。羅紀当年条には十月に唐へ遣使したという記事は見えず、このことから、羅紀編者は①②③を同一の事件を伝えたものと考証した上で、最も詳細な記載の①を依拠書として選んだものと思われる。①をベースとした以上、

③の月次を加筆しなかったことは理解できるが(前述D)、「七月」の出典、加筆の理由は説明できない。

三八番記事は短文であり、依拠書を指摘することはできない。④⑦⑧はこの冊名が正月であったことを伝えるが、編紀に採らない。

さて、羅紀に記載される中国諸王朝への遣使記事、冊封記事の多くは、これまで見てきたように、中国諸史料に記される月次と一致する。しかし、当然のことながら、この月次は中国諸王朝が使節を受け入れ、あるいは加爵を決定した月次であり、新羅が直接知りうるものではない。新羅の記録として残りうる可能性がより高いのは使節の発遣、帰還、あるいは唐使到着の月次であろう。羅紀の月次が中国諸史料と一致する背景には、羅紀編者がこの新羅の記録を捨て中国諸史料の引用を編纂方針としたか、あるいは新羅の記録が存在しないために中国諸史料の忠実な引用を旨としたか、の二通りが考えられる。そこで三八番記事に関連する中国史料④⑤⑥⑦⑧を見ると、④⑦⑧は正月に新羅王への加爵が行われたことのみを記すものであるのに対し、⑤はそれを新羅へ伝えるための遣使が行われたことを記している。正月の加爵決定後新羅へ遣使が行われたのであれば、新羅への到着にはなお数ヶ月を要したと考えられよう。また三六番記事に関連する中国史料①②③のうち③の月次は、新羅朝貢使が唐へ到達した後、正式に受け入れられた月次を示すものであつて、朝貢使が新羅を出発したのは、この月次よりやはり数ヶ月前であつたとしなければならぬ。つまり、三六番記事の「七月」、三八番記事の「三月」という月次はそれぞれ、唐使到着、朝貢使出発の月次として史実の可能性もある。これが新羅の記録『「古記」』に伝

わっていたと考えてよければ、羅紀編者は記事作成に際して次のような手順を踏んだことになる。すなわち、三六番記事は、「古記」の記事に対応する中国記事が①②③であることを考証し、最も詳細な記述のある①をベースとしてその文体を壊さぬよう心がけながら、「古記」の記載を加筆した、と。三八番記事も、依拠書を指摘することはできないが、同様の記事作成過程が想定できるだろう。

以上、両記事の検討から、羅紀編者の編纂態度として次の点が指摘できると考える。

(E) 「古記」の重視

(b) 四五番、四六番、四九番

(四五) 羅紀に対応記事なし。

(四六) 「春正月。王薨。諡曰眞平。葬于漢口。唐太宗詔贈左光祿大夫。賻物二百段。」古記云。貞觀六年壬辰正月卒。同新唐書。賈理通

鑑書云貞觀五年辛卯薨王眞平卒。豈其誤耶。」

(四九) 「唐遣使持節。冊命王爲柱國樂浪郡公新羅王。以襲父封。」

① 『旧唐書』新羅伝 貞觀五年

是歲。眞平卒。無子。立其女善德爲王。宗室大臣乙祭總知國政。

詔贈眞平左光祿大夫。賻物二百段。

② 『新唐書』新羅伝 貞觀五年

是歲。眞平死。無子。立女善德爲王。大臣乙祭柄國。詔贈眞平左

光祿大夫。賻物段二百。

③ 『資治通鑑』唐紀 貞觀五年

是歲。新羅王眞平卒。無嗣。國人立其女善德爲王。

④ 『旧唐書』新羅伝 貞觀九年

遣使持節。冊命善德柱國。封樂浪郡王新羅王。

⑤ 『新唐書』新羅伝 貞觀九年

遣使者冊善德襲父封。國人號聖祖皇姑。

⑥ 『封冊』貞觀九年

是年。遣使持節。冊命新羅金善德。臣金若等曰。善德金眞平之女也。眞平卒無子。乃立善德爲王。以宗室大臣乙祭總知國政。柱國

封樂浪郡公新羅王。

羅紀は四五番を採らないが、その理由は四六番に分註として明記される。すなわち、「古記」√中国史料と。四六、四九番ともに依拠書を指摘することは難しいが、注意すべきは、①②⑥にある「大臣乙祭」の名が善德王元年条に「二月。以大臣乙祭總持國政。」と見え、⑤にある善德王を「聖祖皇姑」と号したことが善德王即位紀に見えることである。史料を分割し、適宜配置するというこの方法は、前述した「三國史記」編者の編纂態度(C)と矛盾する。しかし、大臣乙祭の摂政を二月と伝えるのは羅紀のみで中国史料には見えないことから窺えるように、これらの記事の背景には独自の史料「古記」の存在が考えられる。とすれば、三六番、三八番記事の検討で指摘した如き「古記」の重視は、単に王の薨年だけでなく、羅紀編纂の前提であったと評価しうる。いま、この「古記」について論じる材料を持たないが、「大臣乙祭」「聖祖皇姑」語句が中国史料に見えることから、全くオリジナルなものではなく、すでに中国史料を引用したものである可能性を指摘できよう。

さて、眞平王の死を貞觀五年と伝える中国史料は①②③の三種あ

るが、分註に於て名指しで批判されているのは②(『新唐書』)、③(『資治通鑑』)である。しかし『資治通鑑』の記事は①②と比べて簡潔であり、①(『旧唐書』)の書名を欠落しながら、特に『資治通鑑』の名を記すことは注意を要する。すなわち次のことが言えるであろう。

(F) 『資治通鑑』の特視

(c) 五五番、五八番、六一番

羅紀に見える、六四二年(貞觀十六)から六四四年(貞觀十八)までの、唐との交渉を伝える記事を関連記事を含めて示せば、以下の通りである。

(貞觀十六)

善德十一年正月 新羅、唐へ遣使(五四番)

七月 「百濟王義慈大舉兵。攻取國西四十餘城。」

八月 「又與高句麗謀。欲取党項城。以絕歸唐之路。王遣使告急於太宗。」(五五番)

「是月。百濟將軍允忠領兵攻拔大耶城。都督伊浚品釋。舍知竹竹。龍石等死之。」

(貞觀十七)

十二年正月 新羅、唐へ遣使(五六番)

三月 僧慈藏、唐より帰還(五七番)

九月 「遣使大唐上言。高句麗百濟侵凌臣國。累遭攻襲數十城。兩國連兵期之必取。將以今茲九月大舉。

下國社稷必不獲全。謹遣陪臣歸命大國。願乞偏師。以存救援。帝謂使人曰。我實哀爾爲二國所侵。所

(貞觀十八)

十三年正月

唐へ遣使(五九番)

「太宗遣司農丞相里玄獎齎聖書。賜高句麗曰。新羅委命國家。朝貢不闕。爾與百濟。宜即戢兵。若更攻之。明年當出師擊爾國矣。蓋蘇文謂玄獎曰。高句麗新羅怨隙已久。往者隋室相侵新羅乘讐奪高句麗五百里之地。城邑皆據有之。非返地還城。此兵恐未能已。玄獎曰。已往之事。焉可追論。蘇文不從。」(六一番)

これらに対応すると思われる中国史料はその年次が混乱している。『旧唐書』『百濟伝』『旧唐書』新羅伝、『資治通鑑』唐紀を次に掲げ

以頻遣使人和爾三國。高句麗百濟旋踵翻悔。意在吞滅而分爾土宇。爾國設何奇謀以免顛越。使人曰。吾王事窮計盡。唯告急大國。冀以全之。帝曰。我少發邊兵。契丹靺鞨直入遼東。爾國自解。可緩爾一年之圍。此後知無繼兵。還肆侵侮。四國俱擾。於爾未安。此爲一策。我又能給爾數千朱袍丹幟。二國兵至。建而陳之。彼見者以爲我兵。必皆奔走。此爲二策。百濟恃海之險。不修機械。男女紛雜。互相燕聚。我以數十百船。載以甲卒。枚泛海。直襲其地。爾國以婦人爲主。爲隣國輕侮。失主延寇。歲休寧。我遣一宗支。與爲爾國主。而自不可獨王。當兵營護。待爾國安。任爾自守。此爲三策。爾宜思之。將從何事。使人但唯而無對。帝嘆其庸鄙非乞師告急之才也。」(五八番)

る。

②『旧唐書』百濟伝 貞觀十六年

十六年。義慈與兵伐新羅四十餘城。又發兵以守之。與高麗和親通好。謀欲取党項城以絕新羅入朝之路。新羅遣使告急請救。太宗遣司農丞相里玄獎齎書告諭兩蕃。示以禍福。

③『旧唐書』新羅伝 貞觀十七年

十七年。遣使上言。高麗。百濟。累相攻襲。亡失數十城。兩國連兵。意在滅臣社稷。謹遣陪臣。歸命大國。乞偏師救助。太宗遣相里玄獎齎書賜高麗曰。新羅委命國家。不闕朝獻。爾與百濟。宜即戢兵。若更攻之。明年當出師擊爾國矣。

④『資治通鑑』唐紀 貞觀十七年

九月庚辰。新羅遣使言百濟攻取其國四十餘城。復與高麗連兵。謀絕新羅入朝之路。乞兵救援。上命司農丞相里玄獎齎書賜高麗曰。新羅委質國家。朝貢不乏。爾與百濟各宜戢兵。若更攻之。明年發兵擊爾國矣。

⑤『資治通鑑』唐紀 貞觀十八年

(正月)相里玄獎至平壤。莫離支已將兵擊新羅。破其兩城。高麗王使召之。乃還。玄獎諭使勿攻新羅。莫離支曰。昔隋人入寇。新羅乘釁侵我地五百里。自非歸我侵地。恐兵未能已。玄獎曰。既往之事。焉可追論。至於遼東諸城。本皆中國郡縣。中國尚且不言。高麗豈得必求故地。莫離支竟不從。

右四史料からは、a 高句麗、百濟が新羅を攻め、b 新羅がそれを唐に上表、c 唐は玄獎を高句麗に派遣したという、この事件の大枠が指摘できよう。いま関連中国史料を、項目別に整理して図示すれば

項目	史料											
			羅紀									
a 麗・濟、新羅へ侵攻			(643 9)	(643)	642	(643)	(?)	642	643	(643 9)	(643 9)	×
b 新羅遣使												
1 (上表文の内容)			643 9	643 9	642	643	?	642	643 9	643 9	643 9	×
2 (新羅使と皇帝との会談)			643 9	×	×	×	?	×	643 9	×	×	×
c 1 唐、玄獎を高句麗へ派遣												
2 (聖書の内容)			644 正	643	642	643	?	×	643 9	643 9	643 9	×
3 玄獎の高句麗での行動			×	×	×	×	×	×	×	×	×	644 正

(①『旧唐書』高句麗伝、②同百濟伝、③同新羅伝、④『新唐書』高句麗伝、⑤同百濟伝、⑥同新羅伝、⑦『冊府元龜』外臣部備禦、⑧『資治通鑑』唐紀貞觀十七年条、⑨同十八年条)

右図のごとくになる。⁽¹³⁾

まず a について。これを貞觀十七年にかけて伝える史料は、いずれも新羅の遣使の到達、上書(b)を記し、そのなかで語られている(①③④⑤)。一方、十六年にかける②⑥は、まず a を記し、その後新羅の遣使到達(b)を記すという構造をとる。つまり前者の年次は b にかかり、後者の史料の主眼が a を記すことにあったとすれば、両者の間に矛盾はない。次に c について、これを十六年にかけるのは、a を論じることと主眼があると推察した②⑦であり、この年次にこたわる必要はなからう。十七年にかける①②⑦⑧は、玄獎の派遣と聖書の内容を記す。これに対して、唯一、十八年にかける⑨は、

玄奘の平壤到着とその後の行動を詳細に記載したものである。よって玄奘は十七年に派遣され、十八年に高句麗に到達したと考えることができよう。すなわち、当事件の概要は次の如くであったと考える。

貞観十六年 高句麗、百済が連合して新羅に侵攻

十七年九月 高句麗、百済の侵攻を伝える新羅使至る

唐、玄奘を高句麗に派遣

十八年正月 玄奘、高句麗に至る

さて、この事件は麗紀、済紀にも記載されるので以下に掲げ、併せて考察することとする。

宝蔵王二年九月 新羅遣使於唐。言百済攻取我四十餘城。復與高句麗連兵。謀絶入朝之路。乞兵救援。

三年正月 帝命司農丞相里玄奘資鹽書。賜王曰。新羅委質國

家。朝貢不乏。爾與百済。各宜戢兵。若更攻之。

明年發兵擊爾國矣。玄奘入境。蓋蘇文已將兵擊新

羅。破其兩城。王使召之。乃還。玄奘諭以勿侵新

羅。蓋蘇文謂玄奘曰。我與新羅怨隙已久。往者隋

人入寇。新羅乘勢奪我地五百里。其城邑皆據有之。

自非歸我侵地。兵恐未能已。玄奘曰。既往之事。

焉可追論。今遼東諸城。本皆中國郡縣。中國尙且

不言。高句麗豈得必求故地。莫離支竟不從。

義慈王二年七月

八月

王親帥兵侵新羅。下獼猴等四十餘城。

遣將軍允忠。領兵一萬。攻新羅大耶城。城主品釋

與妻子出降。允忠盡殺之。斬其首。傳之王都。生

獲男女一千餘人。分居國西州縣。留兵守其城。王賞允忠功。馬二十匹。穀一千石。

三年十一月 王與高句麗和親。謀欲取新羅党項城。以塞入朝之路。遂發兵攻之。羅王德曼遣使臣救於唐。王聞之罷兵。

四年(正月) 太宗遣司農丞相里玄奘告諭兩國。王奉表陳謝。

まず羅紀善德十一年七月条以下には、中国史料で復原しえなかった新羅の遣唐使派遣の記事を含む、詳細な記述がある。ところがその文章は、②(⑤)とほぼ一致する。以下にその対応関係を示す。

(羅紀)秋七月。百濟王義慈大舉兵。攻 取國

(②) 義慈 與 兵伐新羅。取

(⑤) 與高麗連和 伐新羅。取

西四十餘城。八月。 又與高句麗 謀欲

四十餘城。 又發兵以守之。又與高麗和親通好。謀欲

四十餘城。 又發兵以守之。又 謀

取党項城。以絶 歸唐之路。王遣使告急於太宗。

取党項城。以絶新羅入唐之路。新羅遣使告急。請救。

取党項城。絶 貢道。新羅告急。

是月。百濟將軍允忠領兵拔大耶城。都督伊凌品釋。舍知竹竹。龍

×

×

石等死之。

×

×

羅紀の文章が②⑤に依拠しているとするならば、新羅の遣唐使発遣を記す部分も、単に、新羅使の到着を伝える②⑤の記載を立場を換えてそのまま転載したものと考えられ、この部分に史料価値を認めることはできないだろう。前述したように、②⑤の伝える新羅の遣唐使は翌年の事実と考えられるのである。しかし、百濟義慈王の侵攻を七月とし、百濟・高句麗連合軍による党項城をめぐるの攻防を八月とすることなどは、②⑤以外の中国史料にも見えない。「是月(八月)」以下の固有名詞を含む記事の存在からも、これらの戦闘に関する独自の史料が羅紀編者の手元があり、それを②⑤によって文飾した可能性が考えられる。一方、済紀義慈王二年七、八月条は、羅紀善德王十一年七月条以下に対応するものであるが、中国史料による文飾は認め難い。特に八月の戦闘については、その成果と事後処理が詳細に記されており、戦闘経過については「竹竹伝」にも詳しい。このことから、右に想定した、当年の戦闘に関する中国史料に修飾されない史料「古記」が朝鮮半島に存在したと考えて大過なからう。済紀の文章はこの「古記」によったと考える。注意すべきは、済紀から復原しうこの「古記」は、高句麗の動向について語らないことである。右記した羅紀の当年条にも、高句麗について記すのは②⑤によって文飾された部分に於いてであって、これらと対応して麗紀の当年条にはこの戦闘に関する記述がない。このことは、もともとこの「古記」は羅・済の交戦のみを

伝えるものであって、羅紀善德十一年条にみた中国史料②⑤の引用は、『三國史記』編纂に至って初めて、羅紀編者の手により為されたものであることを示唆する。

次に、五八、六一番記事を、麗紀の關係記事を含めて、⑦⑨と比較すれば、次の如し。

(五八) 秋九月。遣使大唐上言。高句麗百濟侵凌臣國。累遭攻襲
(⑦) 九月庚申。新羅遣使言。高麗百濟侵凌臣國。累遭攻襲

數十城。兩國連兵期之必取。將以今茲九月大舉。下國社稷必不
數十城。兩國連兵期之必取。將以今茲九月大舉。臣社稷必不

獲全。謹遣陪臣歸命大國。願乞偏師。以存救援。帝謂使人曰。我
獲全。謹遣陪臣歸命大國。願乞偏師。以存救援。帝謂使人曰。我

實哀爾爲二國所侵。所以頻遣使人和爾三國。高句麗百濟旋踵翻悔。
實哀爾爲三國所侵。所以頻遣使人和爾三國。高麗百濟旋踵翻悔。

意在吞滅而分爾土宇。爾國設何奇謀以免顛越。使人曰。吾王事窮
意在吞滅而分爾土宇。爾國設何奇謀以免顛越。使人曰。臣王事窮

計盡。唯告急大國。翼以全之。帝曰。我少發邊兵。契丹鉢鞬直
計盡。唯告急大國。翼以全之。帝曰。我少發邊兵。總契丹鉢鞬直

入遼東。爾國自解。可緩爾一年之圍。此後知無繼兵。還肆侵侮。入遼東。爾國自解。可緩爾一年之圍。此後知無繼兵。還肆侵侮。

四國俱擾。於爾未安。此爲一策。我又能給爾數千朱袍丹幟。二然四國俱擾。於爾未安。此爲一策。我又能給爾數千朱袍丹幟。二

國兵至。建而陳之。彼見者以爲我兵。必皆奔走。此爲二策。百濟國兵至。建而陳之。彼見者以爲我兵。必皆奔走。此爲二策。百濟

恃海之險。不修機械。男女紛雜。互相燕聚。我以數十百負海之險。不修機械。男女紛雜。互相燕聚。我以數十百

船。載以甲卒。枚泛海。直襲其地。爾國以婦人爲主。爲隣國船。載以甲卒。枚汎海。直襲其地。爾國以婦人爲主。爲隣國

輕侮。失主延寇。歲休寧。我遣一宗支。與爲爾國主。而自不可輕侮。失主延寇。歲休寧。我遣一宗支。與爲爾國主。而自不可

獨王。當兵營護。待爾國安。任爾自守。此爲三策。爾宜思之。獨王。當遣兵營護。待爾國安。任爾自守。此爲三策。爾宜思之。

將從何事。使人但唯而無對。帝嘆其庸鄙非乞師告急之才也。』將從何事。使人但唯而無對。帝嘆其庸鄙非乞師告急之才也。』

(六一)正月。太宗遣司農丞相里玄獎。璽書。賜高句麗曰。新

於是遣司農丞相里玄獎。璽書。賜高麗曰。新

(麗紀) 帝命司農丞相里玄獎。璽書。賜王曰。新

羅委質國家。朝貢不闕。爾與百濟。宜即戰兵。若更攻之。明年當

羅委命國家。朝貢不闕。爾與百濟。宜即戰兵。若更攻之。明年當

羅委命國家。朝貢不闕。爾與百濟。各宜戰兵。若更攻之。明年發

出師擊爾國矣。」

出師擊爾國矣。」

兵擊爾國矣。」

兵擊爾國矣。」

×

(9) 相里玄獎至平壤。莫離支已將兵擊新羅。破其兩城。

玄獎入境。蓋蘇文已將兵擊新羅。破其城兩。

高句麗王使召之。乃還。玄諭使勿攻新羅。蓋蘇文謂玄獎

×

高句麗王使召之。乃還。玄諭使勿攻新羅。蓋蘇文謂玄獎

王使召之。乃還。玄諭以勿侵新羅。蓋蘇文謂玄獎

曰。高句麗新羅怨隙已久。往者隋室相侵

離支曰。新羅

曰。我與新羅隙怨已久。往者

隋人入寇。新羅

乘尊奪 高句麗 五百里之地。 城邑皆據有之。 非返地還城

乘尊侵 我地五百里。

自歸

乘尊奪 我地五百里。

其城邑皆據有之。 自非歸

。 此兵恐 未能已。 玄獎曰。 已 往之事。 焉可追論。

我侵地。 恐兵未能已。 玄獎曰。 既往之事。 焉可追論。 至於

我侵地。 兵恐 未能已。 玄獎曰。 既往之事。 焉可追論。

×

遼東諸城。 本皆中國郡縣。 中國尙且不言。 高麗豈得必求故地。
今遼東諸城。 本皆中國郡縣。 中國尙且不言。 高句麗豈得必求故地。

蘇文 不從。

莫離支竟不從。

莫離支竟不從。

このように、五八番記事は⑦、六一番記事は⑨の一部をそのまま転載している。また濟紀義慈王三年、四年の記事については、両記事ともその前半部は②(⑥)と酷似しており、②(⑥)によって文飾したと見ることができる。しかし後半部(「王聞之罷兵」、「王奉表陳謝」)は中国史料には見えない。この部分は濟紀編者の述作とも考えられるが、前年の戦闘に続いて、その後の動向を伝える「古記」(あるいは前述国内史料と一連の史料)の存在も仮定できよう。麗紀宝蔵王二年の記事は②(⑥)の転載であり、同三年の記事は⑧⑨を合成して文章を作っているのである。

さて、当事件に関する「古記」と関連中国史料の取り扱い、記事作成についての三本紀間の相違についてまとめておきたい。すなわち羅紀では、六四二年の戦闘を記す「古記」が、大多数が貞觀十七年にかける中国史料の伝える事件と同一のものと判断した上で、善徳王十一年条の文章を作ったと思われる。その手順は、まず中国史料②(⑥)に「古記」から知りうる月次を加筆し、さらにより詳細な記事を「古記」によって追加するという形を取る。あくまでも中国史料の文章を尊重し、その文体を壊さないことを前提としているといえよう。善徳十二年条は⑦をそのまま転載しているが、その結果、羅紀に於いては、当事件に関係した新羅の遣使が二回行われたかのごとく記載される。これは中国史料の文体を重視した故の、編者の考証ミスであろう。ところが麗紀、濟紀に於いては、六四二年の戦闘について、羅紀のような考証を行ったか疑問である。すなわち濟紀義慈王十二年条は「古記」のみによって文章をなし、翌年条に②(⑥)を、その年月次のままに記載する。麗紀宝蔵王元年条には「古記」の欠如によってこの戦闘は記されず、翌年条に②(⑥)をその年次のままに記載するのみである。ただし濟紀義慈王三年条には中国史料に見えない語句があり、その文章は、中国史料を忠実に転載した後に加筆するという、羅紀に見たと同様の方法を採用している。また羅紀善徳王十三年条、麗紀宝蔵王三年条、濟紀義慈王四年条はいずれも新羅の遣使に対する唐の対応を記したものであるが、それぞれ⑨の一部、②(⑥)、⑧と⑨の合成によって作文するのである。ではこれらの依拠書の違い、取捨は何に起因するのであるか。

先に中国史料から当事件の経過を復原したが、それぞれについて

最も詳細な記載がある史料を指摘すれば次の如くである。

貞觀十六年

a 高句麗、百濟が連合して新羅に侵攻 ②(5)

十七年九月 b 高句麗、百濟の侵攻を伝える新羅使至る

1 (上表文の内容)

⑦

2 (新羅使と皇帝との会話)

④⑦

c 1 唐、玄奘を高句麗に派遣

⑦

2 (聖書の内容)

⑦⑧

十八年正月

3 玄奘、高句麗に至る(高句麗での行動)

⑨

このうち新羅に直接関係するのは a、b、c 1、c 2、高句麗は a、c 2、c 3、百濟は a、c 1 である。右に検討した各本紀の取捨書及び依拠書とはほぼ一致する。すなわち、各本紀編者は中国史料からそれぞれの国に関係する最も詳細な記事を抽出して忠実に、直接関係のない部分は省略して、転載しているといえる。しかし一方で、羅紀では、⑦に同一年・一連の記事としてある新羅の遣使と唐の玄奘派遣を、その前半部は転載しながら(五九番記事)、後半部分の年次を変更している。この⑦では玄奘の派遣を貞觀十七年九月とし、聖書の内容も併記しているが、彼が実際に高句麗に到着したのは、⑨のいうように翌年正月であったと考えられよう。このような考証の下に後半部分の月次の変更を行ったとすれば、中国史料の原文を損なわないよう転載するという先に指摘した『三國史記』編者の編纂方針(C)と矛盾する。しかしこの点についての検討は後述することとし、ここでは年次の変更が⑨、すなわち『資治通鑑』によっているということに留意しておく。

(d) 六四番

「(二月)唐太宗遣使持節。追贈前王。爲光祿大夫。仍冊命王爲柱國。封樂浪郡王。」

①『旧唐書』本紀 貞觀二十二年

是歲。新羅女王金善德死。遣冊立其妹眞德爲新羅王。

②『旧唐書』新羅伝 貞觀二十一年

善德卒。贈光祿大夫。餘官對並如故。因立其妹眞德爲王。加授柱國。封樂浪郡王。

③『新唐書』新羅伝 貞觀二十一年

善德死。贈光祿大夫。而妹眞德襲王。

④『封冊』貞觀二十二年

正月。新羅王金善德卒。贈光祿大夫。以善德妹眞德爲柱國、封樂浪郡王。遣使持節冊命。

⑤『資治通鑑』唐紀 貞觀二十二年

正月己亥。新羅王金善德卒。以善德妹眞德爲柱國。封樂浪郡王。遣使冊命。

右にみるように、中国諸史料間には善德王の死、あるいは眞德王の冊命年について一年の誤差がある。これについて羅紀善德王十六年正月条(善德王の死を記す)に次のような注記がある。

唐書云貞觀二十一年卒。通鑑云二十五年卒。以本史考之。通鑑誤也。

すなわち「本史(『古記』)に善德王の死について記すところがあり、羅紀編者はそれを中国史料より重視したのである。とすれば、眞德王の冊命を同年二月とする羅紀独自の記載も、この「古記」に

よったものと考えられよう。月次以外は、短文でもあり、中国史料によつて文飾されているか判断できない。

さてここで注意すべきは、善徳王の死を貞観二十二年と伝える史料は複数あるにもかかわらず(①④⑤)、そのうち『資治通鑑』だけを名指して批判することである。留意⁽¹⁵⁾。

(c) 六八番、六九番

^a冬。使^a邯^a軻^a許^a朝^a唐^a。太宗刺御史問。新羅臣事大朝。何以別稱年號。

軻許言。曾是天朝未領正朔。是故先祖法興王以來。私有紀年。若大朝有命。小國又何敢焉。太宗然之。遣伊^b浪^b金^b春秋^b及其子文王朝唐。

太宗遣光祿卿柳亨郊勞之。既至。見春秋儀表英偉厚待之。春秋請詣國學。觀釋奠及講論。太宗許之。仍賜御製溫湯及晉祠碑并新撰晉書。

^e嘗召燕見。賜以金帛尤厚。問曰。卿有所懷乎。春秋跪奏曰。臣之本國。僻在海隅。伏事天朝。積有歲年。而百濟強猾。屢肆侵凌。況往年大舉深入。攻陷數十城。以塞朝宗之路。若陛下不借天兵剪除凶惡。

則敝邑人民盡爲所虜。則梯航述職無復望矣。太宗深然之。許以出師。

^f春秋又請改其章服。以從中華制。於是內出珍服。賜春秋及其從者。

^g詔授春秋爲特進。文王爲左武衛將軍。還國。詔令三品已上燕饌之。

^h優禮甚備。春秋奏曰。臣有七子。願使不離聖明宿衛。乃命其子文注

與大監□□⁽¹⁶⁾春秋還至海上。遇高句羅邏兵。春秋從者溫君解。高冠大

衣坐於船上。邏兵見以爲春秋捉殺之。春秋乘小船至國。王聞之嗟痛。

追贈君解爲大阿浪。優賞其子孫。

羅紀の記載を右のようにa-iに区切ると、関連する中国諸史料はそれぞれ次の如き内容を伝えている。⁽¹⁵⁾

①『旧唐書』本紀 貞観二十二年閏十二月癸未

b

②『旧唐書』新羅伝 貞観二十二年

b g d h

③『新唐書』新羅伝 貞観二十二年

b g f d h

④『冊府元龜』外臣部褒異 貞観二十二年十二月

b c g f

⑤ 同 貞観二十三年二月癸巳

h

⑥『資治通鑑』唐紀 貞観二十二年十二月癸未

b g f

a (六八番記事)は新羅が中国の年号を使うことについて新羅使と唐太宗との間に議論があったことを伝えるが、中国史料には関連記事がない。当記事には新羅使名も伝えており、何等かの記録が存在したのであろう。なお『三国史記』年表には、善徳王五年に中国年号の使用を始めたとしている。

b-i (六九番記事)については、右にみるように中国史料にはそのすべてを伝えるものはない。しかし各々の字句を見ると、明かに中国史料による文飾を受けている箇所を指摘できる。横に・を付した字句は④あるいは⑤、△は②、▲は③による文飾と判断できるものであり、●は特定の史料名を挙げることはできないが中国史書にみえるものである。こうしてみると当記事は④⑤をベースとし、④

⑤に記載のないd部分を③によって補い、さらに「古記」の記録を加筆して作成したかに思われる。ところが、④⑤を含めて中国史料に於いては、使者の到着・加授、使者の諸要請、帰国の順(b、c、g、d、f、h)で記載されるのに対し、羅紀では使者への加授は諸要請を列記した後に記されており、その構成が異なる。すなわち前述(c)と矛盾することになる。この点、後述。

(f) 九三番

秋八月。王與勅使劉仁願。熊津都督扶餘隆。盟于熊津就利山。^b初百濟自扶餘璋。與高句麗連和。屢侵伐封場。我遣使人朝求救。相望于路。及蘇定方既平百濟。軍廻。餘衆又叛。王與鎮守使劉仁願。劉仁軌等。經路數年。漸平之。高宗詔扶餘隆。歸撫餘衆。及令與我和好。^c至是刑白馬而盟。先祀神祇及川谷之神。而後歃血。其盟文曰。往者百濟先王。迷於逆順。不敦鄰好。不睦親姻。結託高句麗。交通倭國。共爲殘暴。侵削新羅。剽邑屠城。略無寧歲。天子憫一物之失所。憐百姓之無辜。頻命行人。遣其和好。負嶮待遠。侮慢天經。皇赫斯怒。襲行弔伐。旌旗所指。一戎大定。固可瀦宮汚宅。作誠來裔。塞源拔本。垂訓後昆。然懷柔伐叛。前王之令典。興亡繼絕。往哲之通規。事必師古。傳諸曩冊。故立前百濟大司稼正卿扶餘隆。爲熊津都督。守其祭祀。保其桑梓。依倚新羅。長爲與國。各除宿憾。結好和親。

各承詔命。永爲藩服。仍遣使人右威衛將軍魯城縣公劉仁願。親臨勸誘寔宣成旨。約之以婚姻。申之盟誓。刑牲歃血。共敦終始。分災恤患。恩若弟兄。祇奉綸言。不敢失墜。既盟之後。共保歲寒。若有背盟。二三其德。興兵動衆。侵犯邊陲。明神監之。百殃是降。子孫不育。社稷無守。禋祀磨滅。罔有遺餘。故作金書鐵券。藏之宗廟。子孫萬代。無敢違犯。神之聽之。是誓是福。劉仁軌之辭也。^e歃訖。埋牲幣於壇之壬地。藏其書於我之宗廟。於是仁軌領我使者及百濟。耽羅。倭人四國使。浮海西還。以會祠泰山。^f

羅紀の文章を、a前置き、b百濟との交戦の回顧、c宣誓の様子、d盟文の内容、e盟文の処置、f泰山での会盟に六分するなら、中国諸史料にはそれぞれ当記事に関連する次の如き内容を伝えている。⁽¹⁷⁾

- ①『旧唐書』百濟伝 a c d e + 扶余隆の帰唐
 - ②同 劉仁軌伝 f
 - ③『新唐書』百濟伝 a c d e + 扶余隆の帰唐
 - ④同 劉仁軌伝 f
 - ⑤『資治通鑑』唐紀 a (b) f
 - ⑥『天地瑞祥志』 a d
 - ⑦『唐会要』新羅 a e f
- 右のように中国史料にはa～f全てを伝えるものはなく、特にbの文章の出典を指摘できない。では羅紀編者は、どの様にして記事を作成したであろうか。

まず a、b 部分。会盟の場所について①③⑤⑦は「熊津城」とし、⑥のみ「就利山」とあって羅紀と一致する。しかし、①③⑥は扶余隆の到着と会盟の場所を、⑦は会盟の場所を記すのみである。これに対して、⑤は b についても触れる。中・朝の立場の違いによる書き換えが激しく、また短文であるので比較は困難であるが、全体的な文章のニュアンスとしては、羅紀の文章は⑤に最も近い。a、b 部分は c、d を記すための導入部であり、この点を考慮するなら、羅紀編者が⑤を参照しながら作文したとも考えられる。

次に c d e 部分。d 部分について最も詳細な記載があるのは⑦で、長大な序をも併記する。①の d 部分は⑥から序の部分を省略した形になっている。①と③は c d e を続けて記載するという構成をとるが、前者の方がより詳細である。⑦は e についてごく簡潔に触れるにすぎない。羅紀では、これらのうち全体に渡って記載の詳細な①をそのまま転載している。

最後に f 部分。②④⑤⑦とも内容的にはほぼ同じであるが、会盟の場所について④⑦が「太山」とするのに対し、②⑤は「泰山」とし、羅紀と一致する。このうち⑤は羅紀と同じく会盟者十会盟場所という文章構造をとるが、②は会盟場所十会盟者となっており、依拠書としては⑤を指摘すべきであろう。ほぼ同内容の諸中国史書から、⑤『資治通鑑』を選択していることに留意。

以上にみたように、当記事は、最も多くの事項を詳細に記載する①をベースに作成されたと考える。但し、その文頭は導入部として⑤を参照しつつ作文し、①にある扶余隆の帰唐については、新羅に直接関係のない記事として削除する。そして①に記載のない事項

(f)については、これを他書に求め、加筆するのである。

(g) 一一八番

秋七月。唐玄宗以渤海靺鞨越海入寇登州。遣大僕員外卿金思蘭歸國。仍加授王爲開府儀同三司。寧海軍使。發兵擊靺鞨南鄙。會大雪。文餘山路阻隘。士卒死者過半。無功而還。金思蘭本王族。先因入朝。恭而有禮。因留宿衛。及是委以出疆之任。

当記事に関連する記事を伝える中国史料は次の如し。

①『旧唐書』本紀 開元二十年

九月乙巳。渤海靺鞨寇登州。殺刺史韋俊。命左領軍將軍蓋福順發兵討之。

②『旧唐書』新羅伝 開元二十一年

渤海靺鞨越海入寇登州。時興光族人金思蘭先因入朝留京師。拜爲太僕員外卿。至是遣歸國發兵以討靺鞨。仍加授興光爲開府儀同三司。寧海軍使。

③『旧唐書』渤海靺鞨伝 開元二十年

武藝遣其將張文休率海賊攻登州刺史韋俊。詔遣門藝往幽州徵兵以討之。仍令太僕員外卿金思蘭往新羅發兵以攻其南境。屬山阻寒凍。雪深丈餘。兵死者過半。竟無功而還。

④『新唐書』新羅伝

初。渤海靺鞨掠登州。興光擊走之。帝進興光寧海軍大使。使攻靺鞨。

⑤『新唐書』渤海伝

後十年。武藝遣大將張文休率海賊攻登州。帝馳遣門藝發幽州兵擊

之。使太僕卿金思蘭使新羅。督兵攻其南。會大寒。雪袤丈。士凍死過半、無功而還。

⑥『唐会要』新羅 開元二十一年

加興光寧海軍使。其年。令太僕卿員外置同正員金思蘭使於新羅。思蘭本新羅之行人。恭而有禮。因留宿衛。及是委以出疆之任。且便之也。

⑦『封冊』開元二十一年

是歲。渤海靺鞨越海入寇登萊。詔新羅王金興光發兵討之。仍加授興光開府儀同三司寧海軍使。

右のうち③は新羅出兵を開元二十年にかける。しかしこの史料の主眼は前半部にあり、それは①にある渤海、靺鞨攻撃の第一陣が同年九月に任命されたことに対応するものであろうから、新羅出兵の年次は②⑤⑥に従い開元二十一年とすべきであろう。羅紀はこの記事を開元二十一年「聖德三十二年条に、「七月」という中国諸史料に見えない月次を掲げ、配置する。その文章は、複数の中国史書による文飾が甚だしい。すなわち文字の横に。を付したものは②⑦、・は③、△は⑥による文飾と断定できるものであり、●、▲はそれぞれ③、⑥と近似するものである。これらの引用は錯綜し、ベースとなる記事があったとは思われない。また●、▲の存在も前述(C)と矛盾する。後述。

(h) 二二一番、二二三番、二二三番

(二二八)「秋七月。遣伊浪金隱居入唐貢方物。仍請加冊名。帝御紫宸殿宴見。」

(二一九)「春。唐代宗遣倉部郎中歸崇敬兼御史中丞。持節賫冊書。冊王爲開府儀同三司新羅王。兼冊王母金氏爲大妃。」

(二二〇)「九月。遣使入唐朝貢。」

①『旧唐書』新羅伝 大曆二年

憲英卒。國人立其子乾運爲王。仍遣其大臣金隱居奉表入朝。貢方物。請加冊名。三年。上遣倉部郎中兼御史中丞。賜紫金魚袋歸崇敬。持節冊書往弔冊之。以乾運爲開府儀同三司新羅王。仍冊乾運母爲太妃。

②『新唐書』新羅伝

大曆初。憲英死。子乾運立。甫卅。遣金隱居入朝待命。詔倉部郎中歸崇敬往弔。監察御史陸珽。顧惜爲副冊授之。并母金爲太妃。會其宰相爭權相攻。國大亂。三歲乃定。於是朝獻。

③『唐会要』新羅 大曆二年

憲英卒。冊立其子乾運爲王。三年二月。命倉部郎中歸崇敬兼御史中丞。持節冊命。又冊乾運母爲太妃。

④『冊府元龜』帝王部宴享 大曆三年

五月丙寅。御紫宸殿宴新羅(中略)使。

⑤『朝貢』大曆二年

是年。新羅王金乾運遣其臣金隱居。奉表入朝貢方物。

⑥ 同 大曆三年

九月。新羅(中略)遣使朝貢。

⑦『封冊』大曆二年

二月。以新羅王金憲英卒。國人立其子乾運爲王。遣其臣金隱居請加冊名。詔以倉部郎中歸崇敬兼御史中贊丞。持節冊書弔冊之。以

乾運爲開府儀同三司新羅王。仍冊乾運母爲太妃。

⑤『資治通鑑』唐紀 大曆二年
新羅王金憲英卒。子乾運立。

右の中国史料によれば、唐は大曆二年に、おそらく金隱居の入朝によつて金憲英(景德王)の死と金乾運(惠恭王)の嗣位を知り、翌三年に冊命使を送つたと考えられる。

一方、羅紀の記事であるが、二二〇番記事は⑤の転載であらう。

二一八番、二一九番記事は①④⑤と近似するが、月次等独自の内容を含み、依拠書を指摘することは困難である。可能性としては④の年次を誤刻とし、④と⑤を接続して記事の枠組みを作つたか、あるいは連続した記載のある①を下敷にしたと考える事ができる。なお②には冊命使に関する詳細な記載があるが、採用してはいない。

さて羅紀では景德前王の死を永泰元年(七六五)とし、次のような分註を付す。

古記云。永泰元年乙巳卒。而舊唐書及資理通鑑皆云。大曆二年新羅王憲英卒。豈其誤耶。

『旧唐書』は「古記」に矛盾する詳細な記載ゆゑに批判されていると考えられるが、他の記載の詳細な史料名を挙げず、あえてごく簡潔な記載しかない『資治通鑑』を名指ししていることは注意を要する。さらに、右にみたように二一八番、二一九番記事は①『旧唐書』の記載が参照されているとすると、羅紀編者は自らが名指しで批判した史料を記事作成に用いたことになってしまう。この点、後述。

III

以上、羅紀編者の对中国交渉記事作成の手順として、

(C) 一つの中国史料をベースとし、

(D) ベースとした以外の他史料に関連記事がある場合には、ベースとした記事の文体を壊さぬよう配慮しつつなるべく拾遺する一方、

(B) 当該国に関係のない部分は省略する。記事作成の史料として、(E) 「古記」を重視する

ことを指摘した。(C)について、ベースとなる記事の選定基準は「最も詳細な記載のあるもの」であることも今までの検討で明らかになったと思われる。また中国諸史料に対する評価として

(A) 『冊府元龜』の重視、

(F) 『資治通鑑』の特視、

を指摘した。

先ず(A)について一言。

羅紀編纂に利用された原史料について考える時に注意されるのは、II D-1(b)で指摘したように、すでに中国史料を引用している可能性がある「古記」が存在することである。¹⁸この「古記」のうち、『三国史記』編纂に際して最も重視されたのは所謂『旧三国史』であろう。末松保和氏によれば、『旧三国史』は九一八―一〇一〇年の間に撰進されたものであるから、それ以前に成立した中国史書はこの『旧三国史』編纂に利用された可能性がある。つまりII Bに見た朝貢記事などの多くは、これらの中国史書を引用した「古記」にす

に記されていたとも考えられよう。⁽²⁰⁾これに対して『冊府元龜』の朝鮮半島への伝来は一〇九二年であったと推測されている。⁽²¹⁾『冊府元龜』の記載は簡潔ながら他史書に見えない記事、特に新羅と唐との交渉を豊富に伝えており(前掲表参照)、かつ検索するに易い。これらは羅紀編者にとって魅力的な新史料であったに相違ない。しかし羅紀の文章は『冊府元龜』の記載そのままではなく、特に月次に関しては取捨するところも多い。すなわち、『冊府元龜』の重視とは、おそらく中国史書の引用によって对中国交渉記事に記載していた「古記」を重としつつ、その文章を『冊府元龜』により文飾した結果であると理解することができないのではないか。(C)との関係で言えば、基本的には最も詳細な記載を持つ中国史料をベースとして記事を作るのであるが、短文で中国史料間に特別の差異がない場合には、一律に『冊府元龜』を文飾のために利用したと言うことになる。次に、記事作成の手順として指摘した(C)(D)(B)に矛盾するII C—(c)、(h)とII D—(c)(六十一番記事、(e)、(g)、(h)の六つの記事について。

II D—(g)、(h)は中国史書による文飾を受けていることは確実であるが引用が錯綜しており、これが羅紀編纂時になされたとする(C)と矛盾する。ところが、先述したようにII D—(h)は『旧唐書』によって文飾しながら、羅紀編者はその『旧唐書』の記述を批判している。このことはII D—(h)の『旧唐書』による文飾が羅紀編者の仕事ではなかったことを示唆する。そう考えてよければ、II D—(g)に於て、『冊府元龜』の文章は『旧唐書』を簡略化したものであるから、この記事も『旧唐書』『新唐書』『唐会要』、すなわ

ち『旧三国史』の段階でも利用可能な史書によって文飾されていることになる。以上、両記事が『旧三国史』等の段階で中国諸史料により文飾されていて羅紀編纂時に於て加筆すべき新史料がなく、さらに、すでにかなり長文であり中国史料をベースにしての作文もし難かったために、羅紀編者はこれらをそのまま採用したものと考えよう。両記事は(E)として理解できよう。

II D—(e)は、中国史料からは知り得ない独自の記述が多く、それは朝貢使と皇帝との会話であるという大きな特徴がある。また「冬」条として二つの朝貢記事(六八番、六九番)を併記するのであるが、両朝貢の関係が明かでなく、文章のつながりも悪い。さて中国史料による文飾を指摘できるのは六九番記事であるが、それも三分の一以下にすぎず、『旧唐書』『新唐書』などの『旧三国史』段階でも利用可能な史料を除くと、『冊府元龜』がわずかに利用されているだけである。この六九番記事は金春秋の言動を中心に記載されているが、春秋は第二九代新羅王となった人物である。国王となつた人物の渡海という特別な事情を考えれば、彼に関する記録の中でもより詳細な記録が存在したことが予想されよう。この記録に加え、『旧三国史』等が『旧唐書』『新唐書』を利用していたと考ええると、『旧三国史』の段階ですでに長大かつ詳細な記録となっていたはずで、羅紀編纂時に関連中国諸史料と比較しても改めて加筆すべき事項はほとんどなかったに相違ない。そこで羅紀編者は中国史料をベースとすることなく、「古記」の記載を中心に引用したのではない。すなわち(E)。あきらかに『冊府元龜』による文飾であるc部分の存在は、変則的ではあるが、(D)として理解したい。

ⅡC—(c)、ⅡD—(c)(六一番記事)は(C)と矛盾するのであるが、『資治通鑑』によって文飾、月次変更がなされているという共通点を持つ。さて田中俊明氏は、麗紀に於て『資治通鑑』が文飾のための史料として特別の位置を占めていることを明らかにされている⁽²²⁾。残念ながら『資治通鑑』には新羅と中国諸王朝との交渉について記すところは多くなく、その記事の豊富さでは『冊府元龜』に譲る。そのためか麗紀に於いては、麗紀に於ける『資治通鑑』の位置を、前述のように『冊府元龜』が占めているといえよう。しかし、僅か一例ではあるが、ほぼ同様の記載を持つ中国諸史料のなから『資治通鑑』を選んで文飾している事例があることは(ⅡD—(f))、麗紀編者もまた『資治通鑑』を文飾のための史料として重視していたのではないかと思わせる。ⅡD—(d)、(h)に於て、『資治通鑑』を名指して批判していることは、重視しているが故の、逆の表現と考えられよう。以上、麗紀に於いても『資治通鑑』は語句の修飾のために特別に重視されたと考える。そう考えてよければ、ⅡC—(c)は『新唐書』を、ⅡD—(c)(六一番記事)は『冊府元龜』をベースとしながら、原則を破って、『資治通鑑』により月次の加筆を行ったものと理解できよう。⁽²³⁾

ⅡD—(c)(六一番記事)、(h)は(D)と矛盾する。しかしⅡD—(c)(六一番記事)に於いて『新唐書』劉仁軌伝が不採用となったのは、それが劉仁軌個人の戦果を中心に記すものであるからかも知れない。またⅡD—(h)に不採用となった『唐会要』の当該年条は前述のごとく混乱しており、『文苑英華』は麗紀編者が利用したか確証がない。両記事に於ける詳細記事の不採用は、右のように説明で

きると考える。

以上、麗紀編者は、中国諸史料を無作為に転載するのではなく、一定の原則の下に記事作成を行っていることが明らかになったと思われる。そしてその中国史料についてはこれを尊重し、安易な文章作成をしない⁽²⁴⁾。この厳格な態度は、麗紀の史料的価値を高めるものである。では、この態度と一見矛盾する、中国諸史料にありながら麗紀に不採用となっている記事の存在は如何に説明することができ得るであろうか。今後の課題として擱筆する。⁽²⁵⁾

注

(1) 主たる研究は金錫亨氏『古代朝日関係史』。

(二) 九八四・一二・初稿
(二九八八・一一・改稿)

(2) 井上秀雄氏『三國史記』の原典をもとめて『新羅史基礎研究』所収、初出は『朝鮮學報』四七、田中俊明氏『旧三國史と三國史記』(『朝鮮學報』八三)、『三國史記』中国史書引用の再検討―特にその成立の研究の基礎作業として―(同百四)、坂元義種氏『三國史記』百濟本紀の史料批判―中国諸王朝との交渉記事を中心に―(『百濟史の研究』所収、初出は『韓』四二二)、『三國史記』と中国史書―(時野谷勝教授退官記念日本史論集』所収)、『三國史記』分注の検討―『三國遺事』と中国史書を中心として―(末松保和博士古稀記念会編『古代東アジア史論集』所収、中尾敏郎氏『三國史記』三國相互交渉記事の検討―原典探求のための基礎作業として―(『史境』一〇)。一九六〇年以前の研究としては津田左右吉氏『三國史記高句麗紀の批判』(津田左右吉全集)一一二所収、初出は『滿鮮地理史研究報告』九、三品彰英氏『高句麗王都考―三國史記高句麗本紀の批判を中心として―(『朝鮮學報』一)、三國史記高句麗本紀の原典批判(『大谷大学研究年報』六)がある。

(3) 今西龍氏「朱蒙伝説及老獺稚伝説」(『朝鮮古史の研究』所収、初出は『藝文』六一一)。

(4) 末松保和氏「旧三国史と三国史記」(『青丘史草第二』所収、初出は『朝鮮學報』三九・四〇合輯)。

(5) 末松保和氏「アジア歴史事典別巻 東洋史料集成」第三章朝鮮 3 国(2) 研究。

(6) 坂元義種氏「三国史記」百濟本紀の史料批判(前掲)。

(7) 田中俊明氏「三国史記」中国史書引用の再検討(前掲)。

(8) 以下、中国諸史料は、『冊府元龜』『文苑英華』は大化書局版、『唐会要』は世界書局版、『天地瑞祥志』は朝鮮史編纂会編『朝鮮史』一編第一巻、その他は中華書局版によった。なお羅紀の对中国交渉記事の典拠を指摘したのもとして、文科大学史誌叢書『三国史記』(坪井九馬三・日下寛校訂 吉川弘文館)、朝鮮史編纂会編『朝鮮史』第一編第一巻、第二編、東洋文庫『三国史記』一井上秀雄著 平凡社)がある。本稿作成の際、参照した。

(9) この新羅王名については今西龍氏「新羅骨品考」(『新羅史研究』所収、初出は『史林』七一)、末松保和氏「梁書新羅伝考」(『新羅史の諸問題』所収、初出は『梁書新羅伝の咏評について』『青丘學叢』二五)参照。

(10) 一四番、一五番、二〇番、二二番、二四番、二七番、七二番、一六二番、一七一番、二五四番記事については、それぞれと関連中国史料、また中国史料間にはほとんど差違がなく、検討できない。

(11) 『冊府元龜』外臣部封冊条。以下「封冊」と略す。

(12) 『文苑英華』四七一 新羅書。ここには新羅王金興光に宛てた「書」が三首収録されているが、年次不明史料として不採用になった可能性もある。あるいは『文苑英華』は朝鮮半島諸国と中国諸王朝との交渉を伝える記事はほとんどなく、後述する『天地瑞祥志』と同様、『三国史記』編者が利用しなかった可能性もあろう。

(13) ①『旧唐書』高麗伝 貞觀十七年 遣使上言。高麗。百濟。累相攻襲。亡失數十城。兩國連兵。意在滅臣社稷。謹遣陪臣。歸命大國。乞偏師救助。

太宗遣相里玄獎齎國書賜高麗曰。新羅委命國家。不闕朝獻。爾與百濟。宜即戢兵。若更攻之。明年當出師擊爾國矣。

④『新唐書』高麗伝 會新羅遣使者上書言。高麗。百濟聯和。將見討。謹歸命天子。帝問。若何而免。使者曰。計窮矣。惟陛下哀憐。帝曰。我以偏兵率契丹。鞅鞅入遼東。而國可紓一歲。一策也。我以絳袍丹幟數千賜而國。至。建以陣。二國見。謂我師至。必走。二策也。百濟恃海。不脩戎械。我以舟師數萬襲之。而國女君。故爲鄰侮。我以宗室主而國。待安則自守之。三策也。使者計執取。使者不能對。於是遣司農丞相里玄獎以國書讓高麗。且使止勿攻使未至。而蓋蘇文已取新羅二城。玄獎諭帝旨。答曰。往隋見侵。新羅乘蓋蘇我地五百里。今非盡反地。兵不止。玄獎曰。往事烏足論邪。遼東故中國郡縣。天子且不取。高麗焉得遠討。不從。

⑤『新唐書』百濟伝 貞觀十六年 與高麗連和伐新羅。取四十餘城。發兵守之。又謀取棠項城。絕貢道。新羅告急。帝遣司農丞相里玄獎齎詔書諭解。

⑥『新唐書』新羅伝 貞觀十七年 爲高麗。百濟濟所攻。使者來乞師。

⑦(後掲)

(14) 前記羅紀善德王十六年条註には「二十五年」とあるが、「二十二年」の誤記あるいは誤刻であろう。なお、本稿では現存『三国史記』を現存中国諸史料と比較してきたが、『三国史記』撰上本や、『三国史記』編者が手にした中国諸史料は現在見るものと異なっていた可能性もあり、その意味では単なる文字比較による依拠書の詮索は無意味であるという批判も起こり得よう。しかし、そのような制約があることを認識した上で、とりあえずの検討の結果を提出し、後考を待つこととした。

(15) 注記に言う「唐書」とは、この場合『旧唐書』『新唐書』両新羅伝を指すことになる。なお、田中氏註(7)論文は、『三国史記』において単に「唐書」あるいは「隋唐書」と記された場合、それが新旧いずれを指し、どのような意味を持つのかについて言及されている。

(16) ①『旧唐書』本紀 貞觀二十二年閏十二月癸未 新羅王遣相伊贊干。金春秋及其子文王來朝。

②『旧唐書』新羅傳 貞觀二十二年 眞德遣其弟國相。伊質千金春秋及其子文王來朝。詔授春秋爲特進。文王爲左武衛將軍。春秋請詣國學觀釋奠及講論。太宗因賜以所制溫湯及晉祠碑并新撰晉書。將歸國。令三品以上宴饌之。優禮甚稱。

③『新唐書』新羅傳 貞觀二十二年 遣使文王及弟伊質子春秋來朝。拜文王左武衛將軍。春秋特進。因請改章服。從中國制。內出珍服賜之。又詣國學觀釋奠。講論。帝賜所製晉書。辭歸。勅三品以上郊饌。

④『冊府元龜』外臣部褒異 貞觀二十二年 十二月。新羅國其相伊質於金春秋及其子文王來朝。帝遣先祿卿柳亨持節郊勞之。既至以春秋爲特進。文王爲左武衛將軍。春秋仍請改其章服。以從中製。於是內出珍服賜春秋等。令府給其將從。

⑤同右 貞觀二十三年 二月癸巳。特進新羅金春秋還國。令三品已上宴饌之。優禮甚備。

⑥『資治通鑑』唐紀 貞觀二十二年十二月癸未 新羅相金春秋及其子文王入見。春秋眞德之弟也。上以春秋爲特進。文王爲左武衛將軍。春秋請改章服從中國。內出珍服賜之。

(17) ①『旧唐書』百濟傳 麟德二年八月。隆到熊津城。與新羅王法敏。刑白馬而盟先祀神祇及川谷之神。而後歃血。其盟文曰。往者百濟先王。迷於逆順。不敦鄰好。不睦親姻。結託高麗。交通倭國。共爲殘暴。侵削新羅。破邑屠城。略無寧歲。天子憫一物之失所。憐百姓之無辜。頻命行人。遣其和好負險待遠。侮慢天經。皇赫斯怒。恭行弔伐。旌旗所指。一戎大定。固可藩宮汚宅。作誠來裔。塞源拔本。垂訓後昆。然懷柔伐叛。前王之令典。興亡繼絕。往哲之通規。事必師古。傳諸彝冊。故立前百濟太子司稼正卿扶餘隆爲熊津都督。守其祭祀。保其桑梓。倚新羅。長爲與國各除宿憾結好和親。恭承詔命。永爲藩服。仍遣使人右威衛將軍魯城縣公劉仁願。親臨勸諭。具宣成旨。約之以婚姻申之以盟誓。刑牲歃血。共敦終始。分災恤患。恩若弟兄。祇奉編言。不敢失墜。既盟之後。共保歲寒。若有棄信不恒。二三其德。興兵動衆。侵犯邊陲。明神鑒之。百殃是降。子孫不昌。社稷無守。醜祀磨滅。罔有遺餘。故作金書鐵契。

藏之宗廟。子孫萬代。無或敢犯神之聽之。是釐是福。劉仁軌之辭也。歆訖。埋幣帛於壇下之吉地。藏其盟誓於新羅之廟。仁願仁軌等既還。隆懼新羅。尋歸京師。

②『旧唐書』劉仁軌傳 麟德二年 封泰山。仁軌領新羅及百濟耽羅倭四國酋長赴會。高宗甚悅。擢拜大司憲。

③『新唐書』百濟傳 麟德二年 與新羅王會熊津城。刑白馬之盟。仁軌爲盟辭曰。往百濟先王。罔顧逆順。不敦鄰不睦親。與高麗倭。共侵削新羅。破邑屠城。天子憐百姓無辜。命行人修好。先王負險待遠。侮慢弗恭。皇赫斯怒。是伐是夷。但興亡繼絕。王者通制。故立前太子隆爲熊津都督。守其祭祀。附杖新羅。長爲與國。結好除怨。恭天子命。永爲藩服。右威衛將軍魯城縣公仁願。親臨臨盟。有貳其德。興兵動衆。明神監之。百殃是降。子孫不育。社稷無守。世世毋敢犯。乃作金書鐵契。藏新羅廟中。仁願等還。隆畏衆攜散。亦歸京師。

④『新唐書』劉仁軌傳 及封泰山。仁軌乃率新羅百濟耽羅倭四國酋長赴會。天子大悅。擢爲大司憲。遷右相兼檢校太子左中護。累功封樂城縣男。

⑤『資治通鑑』唐紀 麟德二年。上命熊津都尉扶餘隆與新羅王法敏釋去舊怨。八月壬子。同盟于熊津城。劉仁軌以新羅百濟耽羅倭國使者。浮海西還。會同泰山高麗亦遣太子福男來侍祠。十月丙寅。上發東都。從駕文武儀仗。數百里不絕。列營置幕。獨巨原野。東自高麗西至波斯烏長諸國。朝會者各帥其屬屬從。穹廬毳幕牛羊駝馬。填咽道路。時比歲豐稔。米斗至五錢。麥豆不列于市。⑥『天地瑞祥志』卷二十 麟德二年 秋八月。勅使劉仁願新羅王及百濟隆盟于就利山。其序曰上古炎黃之化。即有戰爭之事。阪泉涿鹿。稱王者之師。遂乎堯舜揖讓而君天下。施仁恩而罷征伐。行義而止干戈。語其升降。會何等級。夏殷相繼。復用戎車。寤兵革之凶免。知文德之戢亂。乃興盟誓之禮。以杜戰伐之源。非夫聖帝哲王。莫能行之者也。故成湯股之聖天子。而景毫之盟。晉文周之霸諸侯。而有踐土之盟。夏后將戰於甘。而作甘誓。周王陳於牧野。而作牧誓。由此言之。盟誓之禮。其所從來自久。春秋二百四十年中。諸侯盟誓多矣。布在方冊。不待煩言。及至漢高祖。誅秦暴。滅強項。威加四海。德被

八荒。乃與佐命功臣。剖符作誓。其文曰。使太山如礪。黃河如帶。子孫傳國。及於後裔。申以丹書之誓。重以白馬之盟。藏之金匱。以垂萬代。然太山何時可如礪。黃河何時可如帶。意欲尊崇祖考。安固子孫。決定嫌疑。蠲除猶豫。君臣揖讓於上。百姓詠歌於下。仁恩霑於草木。禮義洽於昆蟲。時無爭訟之聲。俗保大康之業。斯乃一人有慶。兆庶賴之者也。故知盟誓之義。其大矣哉。結隣國之歡心。成異邦之好合。共敦和睦。永息侵凌。拜昭天地。流芳不朽。可々々々。勉々歟。其文曰。維大唐麟德二年歲次己丑。八月庚子朔十三日壬子。雞林州大都督左衛大將軍開府儀同三司上柱國新羅王金法敏司稼正卿行熊津州都督扶餘隆等。敢昭告于皇天后土山谷神祇。住者百濟先王。迷於逆順。不敦隣好。不睦親姻。結託高麗。交通倭國。共爲殘暴。侵削新羅。剽色屠城。略無寧歲。丁壯苦於征役。老弱疲於轉輸脂膏調於野草。僭逼遍於道路。天子憫一物之失所。憐百姓之無辜。頻命行人。遣其和好。負嶮待還。侮慢天經。皇赫斯怒。驍行弔伐。旌旗所指。若火燎原。電掃風驅。一戎大定。威靈截於海外。聲教被於殊方。固可藩官汙宅。作範來裔。塞源拔本。垂訓後昆。然懷柔伐叛。前王之令典。興亡繼絕。往哲之通規。事必師古。傳諸彙冊。故授前百濟太子司稼正卿扶餘隆。爲熊津都督。守其祭祀。保其桑梓。依倚新羅。長爲與國。各除宿憾。結好和親。恭承詔命。永爲藩服。乃遣使人右威衛將軍上柱國魯城縣開國公劉仁願。親臨勸喻。具宣成旨。約之以婚姻。申之以盟誓。刑牲歃血。共敦終始。分災恤患。恩若弟兄。祇奉編言。不敢失墜。既盟之後。共保歲寒。若有乖背不恒。二三其德。興兵動衆。侵犯邊陲。明神鑒之。百殃是降。使其子孫不育。社稷無守。經祀磨滅。罔有遺餘。故作金書鐵券。藏之宗廟。子孫萬代。無敢犯。神之聽之。是實是福。

⑦『唐會要』新羅 麟德二年 八月。法敏與熊津都督扶餘隆盟于百濟之熊津城。其盟書藏于新羅之廟。于是帶方州刺史劉仁軌領新羅百濟耽羅倭人四國使。浮海西還。以赴太山之下。

(18) 田中俊明氏は「旧三国史と三国史記」(前掲)に於て、高句麗本紀の検討から、「旧三国史」がすでに『後漢書』を引用しているらしいことを指摘さ

れている。

(19) 末松保和氏「旧三国史と三国史記」(前掲)。

(20) 『三国史記』編纂以前の中國史書の朝鮮半島への伝来を示す史料として、

・『周書』高麗傳 書籍有五經。三史。三國志。晉陽秋。

・『蘇東坡集』奏議集卷十三「論高麗貢利書劄子第三首」

淳化四年(九九三)。大中祥符九年(一〇一六)。天禧五年(一〇二二)曾賜高麗九經書。史記、兩漢書、三國志。晉書。諸子曆日。聖惠方陰陽。地理書

等。

・『海東釋史』卷四十二 藝文志經籍總論

宣和間(一一一九―一五五年)有奉使高麗者。其國異書甚富。自先秦以後。晉唐隋梁之書皆有之。不知幾千家幾千集。

靖宗十年(一〇四四)八月。西京報。京內進士明經等。諸業舉人。所業書籍率皆傳寫。字多乖錯。請分賜秘閣所藏九經漢晉唐書論語孝經子史諸家文集醫卜地理律曆諸書。

・同卷四十三 藝文志經籍中國書目 1

晉書。太宗貞觀二十年(六四六)閏三月。詔司空房玄齡等。撰晉書後數載而書就。藏之祕府。以其書賜皇太子。及新羅使者各一部。

哲宗元祐元年(一〇八六)。高麗王遣使。請市太平御覽。按高麗史。肅宗六年(一一〇一)。兵部郎中吳延寵如宋。以朝旨購太平御覽。宋人秘不許。延寵上表懇請乃得還又明宗二十二年(一一九〇)。宋商來獻太平御覽。賜六十

斤。

元祐七年(一一九二)。高麗遣使黃宗慈請市書甚衆。禮部尙書蘇軾。請勿許。然卒市冊府元龜以歸。

・『宋史』高麗傳

哲宗立(一〇八六―一一〇〇)。遣使金上琦奉慰。林暨致賀。請市刑法之書。太平御覽。開寶通禮。文苑英華詔性賜文苑英華一書。

(元祐)七年(一一〇二)。詔許買金箔。然卒市冊府元龜以歸。

さて右のように中國史書が伝来する一方、朝鮮半島では盛んに史書が編纂さ

れている。井上秀雄氏『三国遺事』と『三国史記』(『アジア公論』九一五)によれば、『旧三国史』以降、一〇三二年頃に『七代事蹟』、一〇九六年に『海東三国通曆』、一一〇六〜一一二三年には洪灌が『三韓以来事蹟』を編纂し、『古今録』の名も見える。これらの史書が中国史書を利用したであろうことは十分予想できよう。となれば『三国史記』編者の手元には、中国史料によって文飾を受けたかも知れない「古記」が多数存在していたことになる。

(21) 注(20)参照。

(22) 田中氏は『資治通鑑』の朝鮮半島への伝来が『三国史記』編纂直前であったと推測されている。註(7)論文参照。

(23) 羅紀編者の『資治通鑑』の特視を傍証する記事として、四四番記事を指摘する事も可能であろう。

(四四) 秋七月。遣使大唐獻美女二人。魏徵以爲不宜受。上喜曰。彼林邑獻鸚鵡。猶言苦寒。思歸其國。況二女遠別親戚乎。付使者歸之。

①『旧唐書』新羅伝 貞觀五年

遣使獻女樂二人。皆鬢髮美色。太宗謂侍臣曰。朕聞聲色之娛。不如好德。且山川阻遠。懷土可知。近日林邑獻白鸚鵡。尙解思鄉。訴請還國。烏猶如此。況人情乎。朕愍其遠來。必思親戚。宜付使者。聽遣還家。

②『新唐書』新羅伝 貞觀五年

獻女樂二。太宗曰。比林邑獻鸚鵡。言思鄉。巧還。況於人乎。付使者歸之。

③『資治通鑑』唐紀 貞觀五年

十一月丁卯。新羅獻美女二人。魏徵以爲不宜受。上喜曰。林邑鸚鵡猶能自言苦寒。思歸其國。況二女遠別親戚乎。并鸚鵡。各付使者而歸之。

すなわち太宗の言をより詳細に記す『旧唐書』を採らず、『資治通鑑』を転載するのである。ただし注意すべきは、『資治通鑑』が伝える「十一月」という月次を採らず、「七月」という独自の月次を記す事である。II D-(a)では新羅に於ける入貢使の発遣と、その使節が中国史料に記される月次とのタイムラグを考えたが、この四四番記事の「七月」という月次も「古記」に記されたもので、史実かも知れない。さらに言えば、八〇番記事もその文章

は「朝貢」によっていながら「十月」という月次を採らず、「七月」という独自の月次を記す。三六番、八〇番記事は中国史料「十月」とあるにもかかわらず、羅紀には「七月」と記し、いずれもその間三ヶ月。四四番記事の「十一月」は太宗の言にかかるから、新羅使の入朝はそれより若干早かったと考えられよう。つまり新羅使の「十月」入朝という慣例があり、そのために彼らは三ヶ月の余裕を持って「七月」に出発したのではないか。三八番記事にある唐使は二ヶ月で新羅に到着しており、唐・羅間には普通の行程としては二ヶ月であったと考えられる。以上試みに記すのみ。

(24) ただし、II C-(b)で指摘したように、記事を個別に作成したため、歴史的事実と矛盾する記事も存在する事に注意しなければならない。なお、このような原史料に対しての厳格な態度は、国内史料Ⅱ「古記」に対しても同様であったと思われる。これについて筆者は『三国史記』記載「倭」関係記事について一全「倭」の字を検討する(『委判邪馬台国』二六)に於いて若干触れた事がある。

(25) 『三国史記』において中国史書がどのように利用されたかについて、いわゆる「東明王伝説」に対する先学の評価を一瞥しておく。「東明王伝説」については朝鮮側に『高句麗広開土王碑』、『旧三国史』逸文、中国側に『論衡』、『魏略』、『魏書』、『後漢書』等、豊富な史料があるが、これらと『三国史記』との比較の結果、津田氏は「大体『旧三国史』の記載を略説したにすぎない」(『三国史記高句麗本紀の批判』前掲)とされ、末松氏は「あとろかぎり中国史書の記載を採って、『旧三国史』の伝えを棄て去った」(『旧三国史』と『三国史記』前掲)と評価された。しかし両説を仔細にみても、津田氏は『旧三国史』と『三国史記』における固有名词の一致率に注目され、末松氏は『三国史記』の文章が『魏書』によって作文されていることに注目された見解であることがわかる。すなわち、固有名词等の肝要な点は『旧三国史』により、文章簡略化の材料として『魏書』を使用しているとする田中氏の評価(『三国史記』撰進と『旧三国史』前掲)が妥当であろう。では文章簡略化とは具体的にどのような作業であったらうか。すでに三品氏が指摘

されているように「東明王伝説」は『旧三国史』段階で内容的に最も発展した形を示すが(『三国史記高句麗本紀の原典批判』前掲)、『三国史記』では中国史料に見えない始祖誕生前の物語を前置きとし、その後は『魏書』を転載する。ここで『旧三国史』に見える内容のいくつかは整理されることになるが、固有名詞等は『旧三国史』によって補足される。すなわち中国史料のうち最も詳細な記載のある『魏書』をベースとしてその文体を壊さないように配慮しつつ、「古記」の記載を加筆していると言いうことができ、中国史料の利用の仕方は小稿で検討した羅紀におけると同様である。このことから、小稿の結論は『三国史記』編者の中国史料に対する態度として一般化できるのではないかと考える。なお坂元氏は「百濟滅亡記事の一節」を材料に、「三国史記が中国史書によって記事を作るとき」「できるだけ多くの関係記事を採用する」ために「特定の史書によって文を構えるという安易は捨て、いくつもの関連史書を転々として、それらの記事を採用」しているとされる(『三国史記』百濟本紀の史料批判)前掲)。中国史料の引用がすべて『三国史記』編者の仕事であることを前提とされ、小稿と異なった結論を出されているのであるが、羅紀の記事の一部分を検討したに過ぎない小稿の範囲を越えるので、これについては稿を改めたい。